

## IV. 事業進捗状況

### 鳥取大学

#### 1 COC+事業総括

鳥取大学は、平成25年度よりCOC事業「知の発展的循環プロセスの構築による地域拠点整備事業」に取り組み、その後、この事業の蓄積に基づいて、COC+事業「学生と社会の相互交流による人材育成・地元定着促進プログラム」を平成27年度～令和元年度に実施した。

鳥取県は全国で最も事業所が少ない都道府県であり、県をリードしうる大企業も不在であることから、小さなことでもよいので無から有を生む挑戦ができる人材、すなわち、「こと始め、こと起こしができる人材」を育成し、事業協働地域就職率（鳥取県内の就職率）の向上を目指してきた。具体的には、地域創生のための教育プログラムの確立、インターシップをはじめとした学生と企業間の交流の強化、大学と企業ならびに自治体との連携体制の確立などに焦点を当て、その企画と実装を行ってきた。

これらの活動の詳細は後に譲り、ここでは主な活動に焦点を当て、事業の要点と活動の広がりを時系列的に見ていく。平成27年度では、事業協働地域における全体的な企画調整の場である「とっとり地域志向人材育成・定着イニシアティブ会議」、教育プログラムの企画調整を担う「教育プログラム開発委員会」を設置し、事業協働地域として一体的に活動を推進するための体制を整えた。鳥取大学の学内においても、戦略的に事業の運営を担うための実務的な組織「地（知）の拠点大学による地方創生推進室」を設置した。理事を筆頭とし、学部を横断する全学的な組織としてスタートし、その後には活動を充実するために委員を拡充するなど、事業の進捗に応じて体制を改善してきた。

平成28年度からはコーディネータを配置し、企業との意見交換や事業の広報をはじめとした様々な

活動に着手した。中でも、全国的に注目を集めた活動が「企業見学シャトル便」である。これは、リース車を用いてコーディネータ同伴のもと、学生が気軽に企業に訪問できるようにするための取り組みであり、これまでに多くの学生がこのサービスを利用して企業を訪問した。高校への大学研究紹介パネル展も実施し、高校内で大学の研究に触れてもらう取り組みを行った、その結果、高校の教員と生徒に好評を博し、年々、展示を希望する学校も増えていった。

平成29年度には、インターシップの一層の拡充を図るためインターシップフェスティバル（主催：鳥取県インターシップ推進協議会）を開催した。当日は、県内の大学生を中心に約300名が集まり、県内の就職支援の行事としては、過去に例のない大きな行事となった。年を経るごとに、参加者は増加の一途をたどり、令和元年度においては、県内80の事業所がブースを出展し、過去2回を大きく上回る450名の学生が集まる場に成長した。

平成30年度には、「地域創生推進プログラム」の運用を開始した。このプログラムは、自らのキャリア形成への動機づけをはじめとし、地域の実情や課題の理解、それらを解決するための汎用的な思考や企画立案の方法、プロジェクトによる協働の方法、実務と接点のある講義やインターシップによる現場の体験、関連する学部教育での専門性の修得という多層的なカリキュラムで編成されている。プログラムに登録する学生は年を追うごとに増え、令和元年度現在では113名がこのプログラムに登録し、学習している。また、参加校と連携した授業も開講し、多様な教育メニューを揃えることができた。

平成31年度（令和元年度）には、学生による自主的な活動が定着してきたことが特筆に値する。例えば、学生記者による県内企業の情報発信事業では、企業の情報を学生目線で取材し、県内で働く意義や企業の魅力を発信・拡散している。ツナガルドボクは、学生と建設企業との意見交換、建設業で活躍す

る女性技術者との女子会、学生 SDGs 大会への出場など、建設業界のイメージアップに関する活動を展開している。鳥大防災 Lab. は、大学生が主体となって、地域の防災や減災の普及啓発活動を行っている。

以上のように、「こと始め、こと起こしができる人材」を育成するという当初の目標に向かって着実に歩みを進めることができた。一方、事業協働地域就職率については、好景気の影響もあり、目標の達成には至らなかったものの、事業協働機関へのインターンシップ参加者数、事業協働機関雇用創出数は当初の目標を超えて達成することができた。事業終了後においても、人口が最も少ないからこそ大学と企業、地域との距離が近いという鳥取県の強みを生かし、COC + 事業で育んだ活動、関係、資源に基づいて、地方創生人材の輩出の中核となる活動を継続していく予定である。

## 2 活動実績

### (1) 教育プログラム開発

平成 25 年度に採択された COC 事業では、COC 推進室の教育部門が中心となって基礎科目、臨地科目、実践科目の 3 科目群から構成される地域志向科目を地域志向型人間力教育プログラムとして設定し、平成 29 年 4 月以降の全入学生に対して地域志向科目を選択必修化した。

平成 27 年度に採択された COC + 事業では、小さなことから始め、ことを起こしていくことができる人材の育成を目指して、鳥取県下の 5 高等教育機関、経済団体、金融機関、行政からなる教育プログラム開発委員会を組織し、教育プログラムや単位互換、遠隔講義システム利用などに関する検討を行ってきた。

その内容を基に、地域志向科目、キャリア教育科目、起業・ビジネス科目、プロジェクト科目（キャリアプロジェクト体験科目とスモールプロジェクト実践科目）、インターンシップ、並びに学部専門科目から構成される地域創生推進プログラムを、COC + 推進室の教育部門が中心となって構築し、平成 30 年 4 月に運用を開始した、地域創生推進プログラムは、COC 事業における地域志向科目の一

部を、地域志向科目、キャリア教育科目、起業・ビジネス科目、プロジェクト科目としても位置づけるなど COC 事業における地域志向科目とシームレスに接続されている。

地域創生推進プログラムでは、キャリア教育科目、起業・ビジネス科目、プロジェクト科目において自治体や経済団体、金融機関、地元企業などから数多くの実務家教員を講師として招くことにより、学生に地元の魅力を発信すると共に、地元が抱える課題を発見して解決できる能力を涵養し、また、インターンシップを通して学生と社会の接点を作り、学生の県内への就業意欲を醸成している。

地域創生推進プログラムの中心となる起業・ビジネス科目では、各参加大学が有する能力や専門性を有効に活用し、汎用的な思考方法に加え、政策立案、商品企画など、学生の関心に沿った多様な科目を開設するため、鳥取県内の 4 大学間で単位互換協定と覚書を締結すると共に、単位互換科目の履修案内を作成することで、大学間連携の基盤が築かれた。ただし、鳥取県下の高等教育機関は地理的に大きく離れていることも原因して、他大学における COC + 関連の連携講座科目を履修した学生数は、令和 2 年 1 月までに 1 名のみにとどまっている。連携講座の受講を促進するために、e-learning のシステムを整備したほか、大学間で教員の相互派遣を行ってきた。

各参加校に設置した遠隔講義システムを用いて収録した授業の電子データ（e-learning 教材）はすべて DVD に保存しており、全参加校分が鳥取大学地域価値創造研究教育機構 COC + 推進室で保管されている。同時中継ではない遠隔授業において、第三者の著作物を引用する場合には、著作者の許諾を得るなどの著作権処理を行う必要があるため、教材を作成する際の著作物の取り扱いに関するガイドラインを定め、それに沿って著作権処理が完了したデータから順次 COC + 用 Moodle にアップロードして、公衆送信できる体制を整えた。

大学間の教員相互派遣は、学生にとっては対面授業であるため教育効果の高い連携促進策であり、平成 28 年度から開始し、これまでに 7 科目 8 教員が他教育機関に派遣され授業を担当した。

地域創生推進プログラムによる教育成果の可視化にも継続的に取り組んできた。平成 29 年度に、地域創生推進プログラムの基礎となった COC 事業の地域志向科目と COC + 事業の地域創生推進科目を対象とするカリキュラムマップを作成し、各授業が涵養する能力・資質の重み付けを行った。各学期の成績を用いたカリキュラムマップに基づく可視化を、平成 29 年度は地域志向科目と地域創生推進科目に対して試行し、平成 30 年度以降は地域創生推進プログラムを対象とした可視化に切り替えた。個人の成績データに基づく可視化結果は、履修科目の選択に資するよう、世話教員を通じてプログラムの全履修学生に配布している。また、別途、地域創生推進プログラムにおける授業の教育効果に関するアンケートを実施し、心理学における「ビッグファイブ」に基づく分析を行い、同プログラムの教育効果を確認した。

令和 2 年度以降も地域創生推進プログラムは、PDCA による科目の改廃は多少あるとしても、その教育体系自体を大きく変更せず、鳥取大学地域価値創造研究教育機構が中心となって継続的に運用する。地域志向科目は教育支援・国際交流推進機構教育センターが中心となり引き続き開講し、e-learning と単位互換に関しても、教育センターが推進することとしている。また、教育プログラム開発委員会も、継続して機能させることとしている。このように、COC + 事業における教育活動（活動 1）は、事業終了後（令和 2 年度以降）も、継続的に取り組む予定である。

#### ①「地域創生推進プログラム」の創設

COC + 事業においては、地元定着を促進する目的で、起業家精神を持ち、小さなことから始め、ことを起こしていくことができる人材の育成を目指して、建設的な思考や批判ができる力、アイデアを形にすることができる力、ものごとを前に進めることができる力、事業プロセスを通観することができる力を養うためキャリア教育科目、地域志向科目、起業・ビジネス科目、キャリア・プロジェクト体験科目、スモールプロジェクト実践科目、並びにインターンシップから構成する教育プログラムを構築する計

画として、計画に即して構築した「地域創生推進プログラム」（資料 1）はキャリア教育科目、地域志向科目、起業・ビジネス科目、プロジェクト科目（キャリア・プロジェクト体験科目とスモールプロジェクト科目）、インターンシップと学部専門科目から構成している。キャリア教育科目によって学生に自らのキャリア、地域、企業、自治体を認知させ、またこれまで COC 事業の枠組みで組み立ててきた地域志向科目によって地域を学ばせる。大学連携講座として開講する起業・ビジネス科目は、大学教員と実務家教員が担当し、起業家精神並びにビジネスに関する基本的な思考方法を理論面と実践面の双方から学ばせる。キャリア・プロジェクト体験科目では、いくつかの職業についての就業体験により、就業への興味・関心を持たせる。さらに就業への興味・関心を深めるために、特定の企業・自治体の課題を持ち込んで実施する PBL 形式の授業（スモールプロジェクト実践科目）と、事業協働地域での学生の主体的な学びの機会（インターンシップ）を設け、事業参画・課題協働による就労の意欲を持たせる。これに学部専門科目を加えることで、地域に関する理解から地域課題解決に向けた実践までを内包する教育課程を構築し、地元定着促進につなげる。なお、医学部保健学科看護学専攻の学生に対しては、起業、小さなこと始め、こと起こしという要素を前面に出す代わりに、地域志向科目で学生の関心を地域に向けさせると同時に、学生を地域医療に触れさせることで、地域社会に対する理解を促し、ひいては本事業の目的である地元定着促進につなげることを目指している。

鳥取大学では、地域学部、工学部、農学部向けの「地域創生推進プログラム」として、地域志向科目、キャリア科目、起業・ビジネス科目、プロジェクト科目（キャリアプロジェクト体験科目とスモールプロジェクト実践科目）、学部専門科目から構成される 30 単位コースを、また医学部保健学科看護学専攻向けの「地域創生推進プログラム」として、地域志向科目とキャリア科目、インターンシップ及び医学部専門科目から構成される 20 単位コースを、いずれも平成 29 年度に構築し、平成 30 年 4 月に運用開始した。なお、地域学部、工学部、農学部の学

生にとっては、プログラムの履修登録時に、30単位という修了要件が心理的な障壁になっていたことから、10単位コースと20単位コースを追加し、平成30年10月から運用を始めた。平成30年度には3学部向けコースに10名（地域学部5名、工学部4名、農学部1名）、医学部保健学科看護学専攻コースに20名の学生が履修登録を行った。平成31/令和元年度には3学部向けコースに65名（地域学部16名、工学部30名、農学部19名）、医学部保健学科看護学専攻コースに18名の合計83名が新規に登録している。

各大学は教育プログラムの修了要件を独自に設定できることとし、プログラムが養成する能力・資質に関しては大学間で一貫性を保つように教育プログラム開発委員会で要請してきた。なお、「地域創生推進プログラム」の修了要件を満たした学生には修了認定証を発行する。

#### A. 涵養する能力・資質とカリキュラムマップ

地域創生推進プログラムを策定するために、まずプログラムによって涵養する能力・資質を下表のように再定義した。これは、中央教育審議会による答申「学士課程教育の構築に向けて」（いわゆる学士力答申、平成20年）にある「学士力」と経済産業省による「社

会人基礎力」（平成18年）の中で謳われた能力・資質との整合性に留意してまとめたものである。

各授業科目が涵養する能力・資質を10ポイントとして、A1からD1までの11の能力・資質の重みを授業担当教員が評価したものがカリキュラムマップである。地域創生推進プログラム作成前の平成29年7月に、COC事業の地域志向科目にCOC+事業の地域創生推進科目群を加えた教育課程に対するカリキュラムマップを作成し、同年9月に学生に公開した。平成30年4月の地域創生推進プログラムの運用開始後は、プログラムに含まれる科目のうち全学共通科目のみを対象としたカリキュラムマップ（資料2）に置き換えた。なお、医学部保健学科看護学専攻コースに関してはプログラムに含まれるすべての科目が対象（資料3）となっている。

平成29年10月に受審したCOC+事業の中間評価において、各参加校間で教育プログラムが涵養する能力・資質にぶれが生じないようにとの指摘があったため、その趣旨を教育プログラム開発委員会において各参加校に要請した。鳥取短期大学では平成30年3月、鳥取看護大学では平成30年9月、また公立鳥取環境大学では令和元年9月までにカリキュラムマップが完成しており、大学間で養成する能力・資質には一貫性が保たれている。

#### 地域創生推進プログラムで涵養する能力・資質

学士力・ 社会人基礎力	涵養する能力・資質（コンピテンシー）	
知識 理解 状況把握力	地域の自然について説明できる	A1
	地域の経験・知恵について説明できる	A2
	文化・人々の営みについて説明できる	A3
	社会の仕組みについて説明できる	A4
	地域社会での具体的な課題と取組を説明できる	A5
主体性 実行力 課題発見力 論理的思考力	課題を発見することができる	B1
	課題解決のアイデアを企画立案することができる	B2
	自身の役割をもってプロジェクトに参加できる	B3
	課題解決のプロセスを企画することができる	B4
発信力	自分の意見を分かりやすく伝えることができる	C1
傾聴力	相手の意見を丁寧に聴くことができる	D1

#### B. 地域創生推進プログラムによる教育成果の可視化

教育成果の自己評価・可視化は全学で取り組むべき喫緊の課題であるが、COC/COC+事業では大野賢一教授（学長室・大学評価室）の協力を得て、全学に先立ち試行した。すなわち、カリキュラムマップに示された各科目が養成する能力・資質の重みと、各学期の成績データを用いた可視化の試行を、地域志向科目と地域創生推進科目に対して行った。

その際に、各能力・資質の修得度（個人スコア）は次式に基づいて評価している。

$$\text{個人スコア} = \sum_{\text{科目}} \left[ \begin{array}{l} \text{履修した科目の単位数} \\ \times \text{その科目の能力・資質の重み} \\ \times \text{その科目の得点 (100点満点) / 60} \end{array} \right].$$

平成29年度前期の成績に基づく可視化結果は平成30年1月にCOC+推進室会議において報告し、

また平成29年度後期の成績を用いた可視化結果は平成30年8月のCOC＋シンポジウムで報告した。平成30年4月の地域創生推進プログラムの運用に伴って、それまでの地域志向科目と地域創生推進科目の成績を用いた可視化から、地域創生推進プログラムに含まれる全学共通科目（医学部保健学科看護学専攻コースでは地域創生推進プログラムに含まれる全科目）を対象とする可視化に切り替えた。

これとは別に、地域創生推進プログラムへの履修登録者に対して、涵養する能力・資質の達成度を5段階で自己評価させており、その結果をモニターすることで、能力・資質の修得状況を評価している。科目履修の際の指針となるよう、個人スコアに基づく達成状況と自己評価結果の変遷を示す資料を同プログラムの全履修学生に配布している。平成30年度の成績に基づく個人スコアの平均値と自己評価結果の平均値については、令和元年6月開催の教育プログラム開発委員会において報告した。

添付資料（資料4）は、令和元年度前期終了時での成績を用いて算出した能力別個人スコアの平均値の可視化結果と、自己評価結果の平均値であり、学年進行と共に能力・資質の修得度が向上する傾向を見ることができる。この結果は令和元年12月のCOC＋推進室会議において報告した。なお、これらの可視化結果は、授業内容の改善やカリキュラムマップにおける重み付けの見直しに役立ててきた。

また、本プログラムの選択科目「地方創生政策体験学習」の受講者と非受講者を対象に行った教育効果に関するアンケート（「地域創生推進プログラムにおける授業の教育効果に関するアンケート」）の結果（資料5）から、本プログラムは学外で積極的に活動したいと考えている学生へ、その機会を提供しており、その機会を使ってさらに開放性、外向性が高められた、といった効果が見られた。この結果は令和元年11月のCOC＋推進室会議で報告した。

## ②鳥取県4大学間の単位互換協定締結

学生に幅広い視野に立った学力、能力を身に付けさせるためには、自大学における教育課程だけでなく、得意とする分野が異なる高等教育機関が連携して教育にあたるのが効果的であり、COC＋事業

では連携講座の開設を計画していた。教育プログラム開発委員会において、連携講座を開設するため、参加校間での単位互換に関する包括協定を締結することとされ、地方創生推進委員会において承認された。平成29年6月5日に4大学間でCOC＋関連科目に限定しない「鳥取県4大学間の単位互換に関する包括協定書」（資料6）を締結し、その後、細目について「鳥取県4大学間の単位互換に関する包括協定についての覚書」（資料7）の締結を行なった。なお、米子工業高等専門学校については、平成33（令和3）年度に予定している改組後に協定に参加することを検討している。

### A. 単位互換協定に基づく講座開設

「鳥取県4大学間の単位互換に関する包括協定書」と「鳥取県4大学間の単位互換に関する包括協定についての覚書」に基づき、平成29年9月に「鳥取県4大学間単位互換科目履修案内」（資料8）を作成し、各大学のホームページに掲載して学生に周知を行い、平成29年度後期から単位互換協定に基づく講座開設を開始した。この履修案内は毎年度更新されており、資料8は令和元年度後期開講科目を対象とした履修案内である。

### B. e-learning 開設に関するガイドライン

鳥取県5高等教育機関は地理的に最大100km程度離れ、公共交通機関も不便であり、また、4年制大学、短期大学、高等専門学校と学校種・学事暦等も異なるため、学生が互いに他学に出向いて受講することは困難を伴う。そのため、現実的な連携形態としてはe-learningと大学間の教員相互派遣が考えられる。COC＋事業では、遠隔講義システムを導入し、授業の収録データを共有するe-learningによって参加校間の連携を図ることとしていた。e-learningによる履修に対して単位を認定する上で、開設科目、1科目の時間数、科目名称、履修期間、履修手続き、受講制限、成績評価法などについて規定しておく必要があることから、平成30年2月に「鳥取県4大学間単位互換科目にかかるe-learning 開設に関するガイドライン」（資料9）を定めた。

**C. e-learning 教材の著作物利用に関するガイドライン**

遠隔講義システムによって録画した授業の電子データを COC +用 Moodle にアップロードし、参加校間でオンデマンド視聴ができれば、e-learning としてのシステムが完成することになる。通常の対面授業や遠隔地への同時中継では第三者の著作物を利用する際に著作者から許諾を得る必要はないが、同時中継でないオンデマンド型の e-learning で利用するには、著作権法に即して慎重に著作物を取り扱う必要がある。そこで、教育プログラム開発委員会のメンバー（鳥取大学2名、公立鳥取環境大学1名、鳥取短期大学1名）が e-learning に関して先進的な取り組みを展開している北海道大学高等教育推進機構と同大学大学院工学研究院工学系教育研究センターを訪問し、著作権処理に関する情報収集を行った。鳥取大学ではそこで得た知見に基づいて、「遠隔講義システムの教材作成における著作物利用に関するガイドライン」（資料10）を平成30年11月に作成し、e-learning 教材の著作者（授業担当者）と e-learning 教材の管理者との間で取り交わすガイドライン内容に同意した旨を確認する「e-learning 教材の作成・使用に関する確認書」（資料11）を、平成31年2月に作成した。

これを受けて鳥取短期大学では平成31年3月、鳥取看護大学では令和元年6月までに、また公立鳥取環境大学では令和元年11月にガイドラインと確認書を作成した。

**D. e-learning 教材作成のながれ**

「遠隔講義システムの教材作成における著作物利用に関するガイドライン」に沿って作成された教材（電子データ）に含まれる第三者の著作物に対して、著作権処理が必要か否かを判断し、必要な場合にはその処理内容を決定した上で、処理を実施する仕組みを作る必要がある。鳥取大学では e-learning 教材の管理者と、管理者が任命する実務担当者が行う職務内容を「e-learning 教材の管理者等が行う職務内容」（資料12）として、また、授業内容の収録依頼から COC +用 Moodle へのアップロードまでのフローチャートを、「COC +関連科目の e-learning 教材作成に伴う著作権処理作業のながれ」（資料

13）として令和元年5月にまとめた。

**E. COC +推進室所有の収録済み DVD**

各参加校において遠隔講義システムを用いて収録された DVD は、鳥取大学地域価値創造研究教育機構 COC +推進室においてすべて保管されており、その数は令和2年1月9日の時点で242件に達した。そのうち、同日までに著作権処理を施した上で COC +用 Moodle にアップロード（公衆送信）したものは8件である。鳥取大学における「経済経営哲学」の1コマ分については、鳥取短期大学の生活学科情報経営専攻2年生向け選択科目「マーケティング」において教材として活用され、38名の学生が受講した。

**F. 大学間の教員相互派遣**

連携講座の受講を促進する目的で、教員の相互派遣を行っている。令和元年11月末までに実施された相互派遣は以下の通り7科目8名である。

年度	開講科目	派遣教員
平成28年度	鳥取短期大学 「現代鳥取学」	山内有明 特命教授（鳥取大学）
平成29年度	鳥取短期大学 「現代鳥取学」	山内有明 特命教授（鳥取大学）
平成29年度	鳥取大学 「日本文学と地域文化」	岡野幸夫 教授（鳥取短期大学）
令和元年度	鳥取大学 「地域創生入門」	倉持裕彌 准教授（公立鳥取環境大学）
令和元年度	鳥取大学 「地域創生入門」	野津伸治 教授（鳥取短期大学）
令和元年度	鳥取短期大学 「現代鳥取学」	野田邦弘 特命教授（鳥取大学）
令和元年度	米子工業高等専門学校 「社会科学」	海老沼孝郎 教授（鳥取大学）
令和元年度	公立鳥取環境大学 「基礎インターンシップ」	長尾博暢 准教授（鳥取大学）

**③ COC +シンポジウムの開催**

COC +事業では当初、FD活動のために教育プログラム開発委員会に下部組織を創設することとしていたが、教育プログラム開発委員会自体にその機能を担わせるように変更した。教育プログラム開発委員会ではFD活動の一環として、平成30年8月8日に COC +シンポジウムを開催した。（下記スケジュール）シンポジウムでは、平成29年10月に実施された COC +事業の中間評価において「S」評価を獲得した岐阜大学と徳島大学から講師を招き、先進的な COC +事業の取り組みを紹介してもらい、また、各参加校における取り組みについて報

鳥取大学 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 シンポジウム

日時：2018年8月8日(水曜日) 午後1:30-5:40

場所：鳥取大学鳥取キャンパス 共通教育棟 3F 第1会議室

予定時刻	講演者	講演題目
1:30-1:40	豊島良太 鳥取大学長	開会挨拶
1:40-2:20	益川浩一 岐阜大学 地域協学センター 教授 センター長	基調講演 次世代地域リーダー育成プログラムによる地域志向人材の育成 — 岐阜大学 COC・COC+事業の取組 —
2:20-3:00	玉 真之介 徳島大学大学院総合科学教育部 教授 COC プラス推進監	基調講演 新たなインターンシップの開発を目指して — 徳島大学発 COC+の取組 —
3:00-3:10	休憩	
3:10-3:20	谷本圭志 鳥取大学大学院工学研究科 教授 COC+幹事長、副推進室長	鳥取県の現状と鳥取大学 COC+事業について
3:20-3:30	藤村 薫 鳥取大学地域価値創造機構 特任教授 COC+教育部門長	鳥取大学における地域創生推進プログラム
3:30-4:20	三浦政司 鳥取大学大学院工学研究科 助教	ものづくり実践プロジェクト成果報告
4:20-4:30	休憩	
4:30-4:40	土居裕美子 鳥取看護大学 教授	鳥取看護大学における取り組み
4:40-4:50	羽根田真弓 鳥取短期大学 教授	鳥取短期大学における取り組み
4:50-5:05	加藤博和 米子工業高等専門学校 教授 地域共同テクノセンター副センター長	米子工業高等専門学校における取り組み
5:05-5:20	吉永郁生 公立鳥取環境大学環境学部 教授 地域イノベーション研究センター長	公立鳥取環境大学における取り組み
5:20-5:30	長尾博暢 鳥取大学キャリアセンター 准教授 COC+キャリア支援部門長	鳥取県におけるインターンシップと COC+事業
5:30-5:40	法橋 誠 鳥取大学理事、COC+推進室長	閉会挨拶



【岐阜大学 益川浩一 教授】

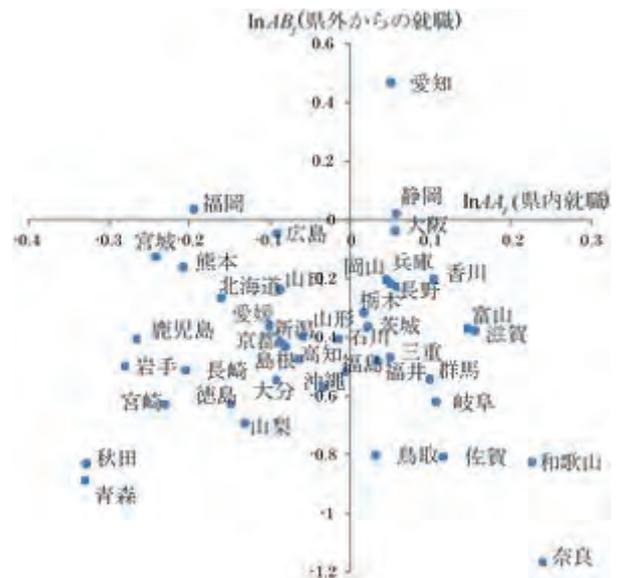


【徳島大学 玉真之介 教授】

告を行った。これにより、各参加校のCOC+事業に対する意識が高まったと同時に、事業の方向付けを明確にすることができた。

④地元定着の実態に関する解析

都道府県の地元定着の実態について、国勢調査、学校基本調査のデータを用いて解析を行なった。具体的には、出身地から県外に進学した学生が再び出身の都道府県に戻って就職した実績と、当該の都道府県の大学へ進学した学生がその都道府県にて就職した実績の二つの観点から、各都道府県がどのような位置づけにあるのかを明らかにした。加えて、地域にどのような環境があれば、これらの就職を促進しうるかを統計的に明らかにした。研究の成果は、土木学会の土木計画学研究発表会ならびに独立行政法人統計センターが主催する研究会にて発表した。



【都道府県における地元定着に関する評価（右上ほど良好な状態）】

(出典) 谷本圭志、山口博哉：地域特性に基づいた地元定着政策の立案支援に関する一考察、土木学会論文集 D3 (土木計画学)、Vol.73、No. 5、(土木計画学研究・論文集 34 巻)、I\_367-I\_377、2017.12.

#### IV. 事業進捗状況／鳥取大学

このうち、前者については査読付論文として論文集に記載され、Jstageにて閲覧が可能になっている。

##### ⑤学生の自主的な活動

##### A. 学生による自主的な地域活動の定着と「学生 Small CoRE Project」(\*)の創設

###### ○学生記者

鳥取県商工労働部と連携し実施した取り組みであり、県内企業の様子や就職活動に関する取り組み等を学生目線で取材し、県内で働く意義や企業の魅力を発信・拡散することで、学生の県内定着を促進することを目的としている。



###### ○ツナガルドボク

地域の建設業者と連携して建設業の仕事の魅力を学生へ発信することを目的として活動する「ツナガルドボク」は、学生と建設企業との意見交換、建設業で活躍する女性技術者と女子学生との交流会、学生SDGs大会への出場など、建設業界のイメージアップに関する活動を展開している。



###### ○鳥取防災ラボ Lab.

学生が主体となって地域の防災や減災の普及啓発活動を行うことを目的として活動する「鳥大防災Lab.」は、学内での防災講演会・HUG大会や、地域での防災ワークショップを企画・実行している。



##### (\*)「学生 Small CoRE Project」の創設

「人間力」豊かで地方の創生に貢献する人材を育成する上で、学生が主体的・自主的に取り組む課外活動も有益なものと考えられる。そこで、鳥取大学では平成30年度から株式会社鳥取銀行の寄附を基に、学生の主体的な地域貢献への取り組みを公募・支援する「学生 Small CoRE Project」を創設した。地域貢献にチャレンジすることが学生の成長のきっかけになり、その取り組みが地域創生につながる小さな核となることが期待される。

##### 【参考】令和元年度 鳥取大学学生 Small CoRE Project の概要

###### ○子どもたちのためのものづくりプロジェクト

子どもを対象としたものづくり指導と教材開発に取り組む

###### ○空きビルを活用した美術制作の拠点づくりプロジェクト

空きビルを活用したアートPJを地域と連携して行う

###### ○引きこもり児童の親サポート BOT

地域団体と連携して引きこもり支援BOTプログラム開発に取り組む

###### ○清水の湧き出る町に笑顔を通じた心の交流を通して生まれる絆

～「また会いたい」を増やす取り組み～

地域団体の協力を得ながら地域資源である湧き水を活かす方策を企画実施する

- 建築を学ぶ学生団体「CITA」による地域との繋がり創出プロジェクト

地元建築士等と協働して実践プロジェクトや建築コンペにチャレンジする中で地域と連携した学びの拠点を作ろうとする取り組み

- 鳥取のまちが持つ興味と魅力の調査  
～CREATE プロジェクト～ (Congregate Return Energy Attract Trend Excite)  
鳥取市中心市街地活性化事業の動向調査とまちなかの魅力発信を行う

#### B.アントレプレナーの誕生

～県内高等教育機関での学びや課外活動を通じて修得したスキルを活かして起業するアントレプレナーも誕生している。

- “漬けもの”で地域おこし ～「やたらんど+子ども農園」  
(平島和貴：平成31年3月鳥取大学農学部卒業、JA勤務)

鳥取市鹿野町の河内果樹里山計画に参加し、耕作放棄地や過疎化、人口減少という問題に向き合い、河内の魅力を伝え、交流人口をふやしたいとの動機から、やたら漬け×若者、やたら漬け×鹿野町、やたら漬け×鳥取県とのコンセプトで活動開始しました。農業体験を通して、子供達や地元農家に活力を生み出し、やたら漬けを楽しめる定番スポットを目指しています。JA全農のビジネスプランコン



テストで入賞。

- 米子市で合同会社TURIPテクノロジズを創業  
(影山智明：平成31年3月鳥取大学大学院工学研究科修了)

IoT技術等導入による省力化は、小企業や個人事業主などにこそ重要です。そのためには、システムの構築・運用コストを圧縮する必要があり、鳥取大学工学部ものづくり教育実践センターのプロジェクトで開発したIoT・ロボット制御用通信仕様「TURIP」を用いて一般の人でもIoTシステムを構築できるようにするとともに、人材教育教材としての利用についても開発を行っています。【写真：TURIPを活用した子ども向け教育プログラムの実施（鳥取大学および株式会社アクシスとの連携事業）】



- IT×農業×メディア業  
(森本 萌：平成30年3月鳥取大学農学部卒業、IT企業採用責任者)

キノコの研究を志し鳥取大学へ進学し、学外部活動として参加した中山間地域での6次産業化プロジェクト等で習得したIT関連スキル等を駆使し、県内の飲食店情報発信（「鳥取なにたべ！」）を開始するとともに、サボテンなど多肉植物の栽培販売など小商いも実践しています。（鳥取ビジネスプランコンテスト2016学生部門大賞受賞）



○ “西郷地域ブランディングプロジェクト” 参画  
 (鎌苅慧哉：鳥取大学地域学部在学中)

鳥取市河原町西郷地区周辺の工芸、自然、伝統・伝説、農林業、食文化等「営みの積み重ね」の情報を集約・発信し、体験ツアーを企画・提供する「カルシル」を設立します。事業を通じて「観光コンテンツの創造」「観光客の滞在場所の構築」「既存の事業者との連携」を目指し、地域資源を活用した体験ツアーを通じて、鳥取にある価値を伝えていきたいと考えています。



(2) キャリア支援

鳥取県内の産官学で構成する「鳥取県インターンシップ推進協議会」を実施主体として地域協働型インターンシップ(事業名「とっとりインターンシップ」)を進めた。学生の参加者数はCOC+事業補助期間の5年間を通じ一貫して前年同時期を上回る増加を示し、COC+事業の数値目標を平成28年度に達成し、鳥取県が独自に設定した平成31(令

和元)年度数値目標(参加学生数400名)も平成30年度に達成した。

併行して、鳥取大学におけるキャリア教育科目を見直し、1年生前期の履修科目「キャリア入門」において、鳥取の「働く」や「暮らす」について理解を深める内容を新たに盛り込んだ。特に「働く」については、平成29年度より例月6月に開催している「とっとりインターンシップフェスティバル」への参加を推奨した結果、本学から293名の学生が参加した。

また、「地域就業論」と「ワーク・ライフ・バランス論」を新たに開講した。「地域就業論」では、学生たちが地域の産業界に対して、事実・実態に根差した適正な理解と積極的な認識をもてるよう、県内の企業関係者等に多数ご登壇いただいた。「とっとりインターンシップ」の合同企業説明会への参加や、ワークショップ、交流会の授業内への組み込みを通じて、県内産業界の情報を得る機会を大幅に拡大している。「ワーク・ライフ・バランス論」では、鳥取県子育て・人材局子育て王国課と連携して、地域を舞台としたワーク・キャリアとライフ・キャリアの双方について理解を深める体験型メニューを用意した。

県内企業との共同研究に学生を参加させることを通じて、キャリアビジョン形成や県内就職を促進することを狙いとした「共同研究型インターンシップ」では、インターンシップ実施に必要な費用を支援するCCC+事業独自の制度を整備した。

また、グローバル展開のための「インターンシップ」として、企業活動のグローバル展開を支援するため、留学生の参加を積極的に想定したインターンシップにも着手するとともに、鳥取県、JETRO鳥取、鳥取県産業振興機構とっとり国際ビジネスセンター、本学国際交流センター、キャリアセンターの各機関が活動を調整し、協働して留学生の県内定着を促進するための体制を整備し、情報共有と活動の連携を図り、合同企業説明会や「留学生のための就職セミナー」を開催し、県内企業についての認識や就職活動について理解促進を図った。

地域協働型インターンシップや「地域就業論」においては、参加学生数等の実績が増加していったが、

県内就職実績の推移から見て、県内定着促進という面では課題を残した。

今後とも、県内産業界、行政等のステークホルダーと学生が、顔の見える関係を育む機会の創出を継続することが重要である。

#### ①地域協働型インターンシップ

「地域協働型インターンシップ」は、鳥取大学が平成24年度に採択された文部科学省の補助事業、「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」をルーツにもつ取組であり、補助期間終了後の平成27年度からは、鳥取県内の産官学で「鳥取県インターンシップ推進協議会※」を切れ目なく自主的に立ち上げ、さらにその後のCOC＋事業の開始に伴い、同事業との一体運用という実施体制で現在に至っている。なお取組の名称については、わかりやすさ・親しみやすさという観点から、平成28年度からは「とっとりインターンシップ」という呼称を用いている(以下、『とっとりインターンシップ』)。

「とっとりインターンシップ」への学生の参加は、夏季と春季の二回の長期休暇に集中しているが、いずれのシーズンとも、参加者数はCOC＋事業補助期間の5年間を通じ一貫して前年同時期を上回る増加を示してきた。COC＋事業としての最終年度数値目標は平成28年度にクリアしているほか、鳥取県が独自に設定した平成31(令和元)年度数値目標(参加学生数400名)も1年前倒しの平成30年度で達成している。

毎年6月に開催している「とっとりインターンシップフェスティバル」は、令和元年度で3回目を迎えた。令和元年度のフェスティバルでは、インターンシップの受け入れを行う県内80の事業所がブースを出展し、過去2回を大きく上回る450名の学生が集まるなど、インターンシップに関する大規模イベントとしての地位を確立している。

今後の主な課題は、参加学生のさらなる増加(掘り起こし)とプログラムの質的向上である。

参加学生の掘り起こしについては、参加学生の増加傾向に鈍化がみられるため、各学校に在籍する学生はもちろん、部局や教職員に対して、いっそう周知する必要があり、今後も、県内産官学のさまざま



「とっとりインターンシップフェスティバル」(令和元年6月22日(土))

なチャンネルを積極的に活用していく。「とっとりインターンシップフェスティバル」や、春季インターンシップの合同説明会については、参加学生数の伸びが続いていることから、それら催事に参加した学生が、受入企業が用意しているプログラム内容にあまり魅力を感じていない可能性も考えられる。その意味でもプログラムの質的な深化が問われる。

プログラムの質を上げていくためには、県内産業界との密接なコミュニケーションが不可欠である。昨今の人材不足感や採用難もあって、企業側の、インターンシップに対する積極性とプログラムの充実に対する問題意識は高まっているが、これまでのような企業の採用スケジュールを前提・優先とした取組の設定や、しばしばありがちな企業目線での自社PRどまりのコンテンツ(独りよがりの『魅力』発信)では、現在の若者に訴求しない—いまどきの表現を用いるならば“刺さらない”—ことも、特にここ最近、現場レベルで実感される。都市部や大企業に比べて各種条件で不利・劣勢といわれる地方のインターンシップこそ、若者の「知りたい」や「わかりたい」に正面から向き合い、地方で働き、暮らし続けることに関する不安や悩み、葛藤に至るまで、若者の気持ちに丁寧に寄り添う姿勢が問われている。プログラムの質を向上させるため、平成27年度より「インターンシップ推進フォーラム」を開催しており、令和元年度は企業関係者を中心に産官学から160名の参加があった。この取り組みを継続することにより「地域協働」を実質化し、インターンシップの質を向上させる必要がある。また、平成30年

IV. 事業進捗状況／鳥取大学



「インターンシップ推進フォーラム」(令和2年1月30日(木))

※鳥取県インターンシップ推進協議会 構成機関  
鳥取県、鳥取大学、公立鳥取環境大学、鳥取短期大学、米子工業高等専門学校、鳥取県商工会議所連合会、鳥取県商工会連合会、鳥取県中小企業団体中央会、鳥取県経営者協会、ふるさと鳥取県定住機構、NPO 法人学生人材バンク

度の導入後、受け入れ企業及び参加学生数ともに伸び悩んでいる長期・有償プログラム(資料14)の改善や留学生に参加しやすいプログラムの開発も必要である。

②学生参加型の産官学共同研究 ～共同研究型インターンシップ

県内高等教育機関と県内企業等との共同研究に学生が参画し、一定期間インターンシップとして研究活動を行うことにより、共同研究の推進と自らのキャリアビジョンの形成や県内企業への理解を深

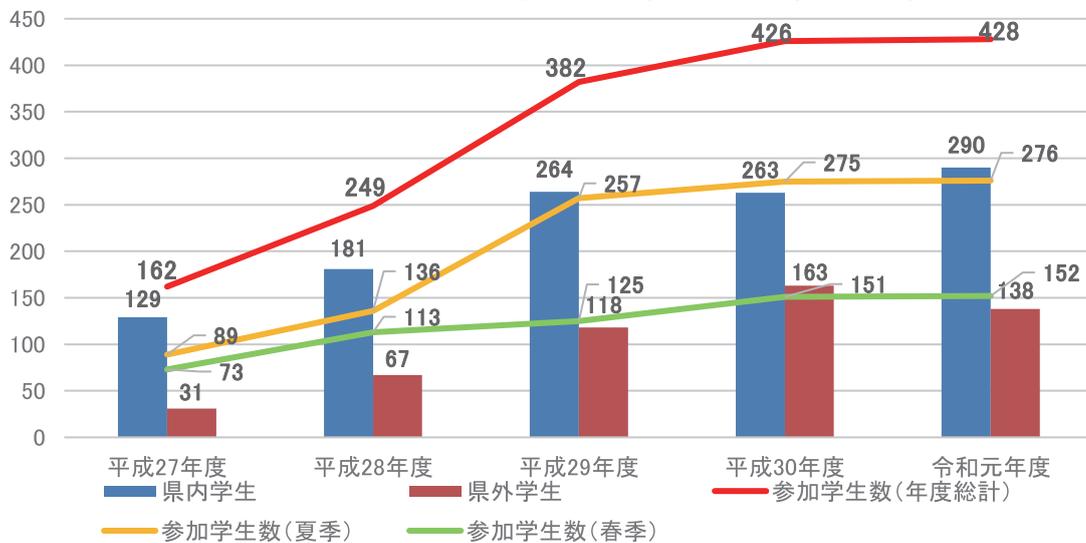


(出所) 毎日新聞 (令和元年6月23日(日)朝刊)

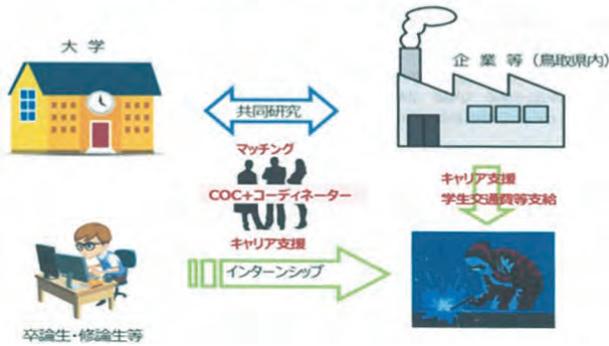


(出所) 山陰中央新報 (令和2年2月1日(土)朝刊)

地域協働型インターンシップ 参加学生数(平成27-令和元年度)



学生参加型の共同研究イメージ



め、県内企業等への定着を促進するとともに、企業の研究開発力を強化するため「学生参加型の産官学共同研究～共同研究型インターンシップ」を独自に実施した。

〈事業内容〉

企業等が実施費用の一部を分担し、又はその設備・資材の利用、職員の研究参画等で便宜を供与しつつ、本学等の常勤教員が実施責任者となって、当該企業等との共同研究を実施するとともに教育活動の一環

COC+「共同研究型インターンシップ」事業一覧

年度	共同研究担当者（大学側）			企業等の名称	研究課題名
	学部	職名	氏名		
H28年度	地域学部	准教授	鈴木 慎一郎	鳥取市立賀露保育園	鳥取市内保育所における童謡の実践に関する研究
	医学部	准教授	加藤 信介	株式会社ジービーシー	認知症モデル動物を用いた簡易認知障内評価システムの開発と事業化検討
	医学系研究科	助教	宇野 愛海	株式会社トランスクロモソミックス	人工染色体ベクターを用いたデュシェンヌ型筋ジストロフィーの細胞治療
	工学研究科	助教	櫛田 大輔	株式会社ケイズソフトウェア研究開発センター	転倒防止のための入院患者の体動検知と転倒危険度予測システムに関する研究
	工学部	助教	三浦 政司	株式会社 UNIMOG	地域資源を活用した低コスト型なまず養殖技術に関する機器開発
	地域学部	教授	石谷 幸二	郡家コンクリート工業株式会社	コンクリートの特性を踏まえた立体造形の創作
	工学研究科	准教授	増田 貴則	弓ヶ浜水産株式会社	陸上環境養殖設備を利用したギンザケの生産性向上と環境負荷低減
	工学研究科	准教授	増田 貴則	共和水産株式会社	ギンザケ陸上環境養殖施設の排水・排汚泥の有効活用方法の検討
	農学部	准教授	北村 直樹	薬局山本	ホーリーバジルのもつ生物活性の探索
H29年度	農学部	教授	山本 定博	株式会社大協組	ムカデ芝による法面・畦畔緑化の利点の明確化とその検証
	医学部	准教授	加藤 信介	株式会社ジービーシー研究所	簡易認知障害評価システム装置の複数化およびそれに伴う当該装置の小型化の検討：当該装置の商品化のための基礎研究
	医学部	教授	山本 美輪	日南町役場	看護職の認知症高齢者ケアにおける困難感の概要
	医学部	教授	松浦 治代	江府町役場	中山間地の小規模自治体における「認知症」対策と保健師の役割
	工学研究科	教授	黒田 保	鳥取県コンクリート製品協同組合	コンクリート製品工場から発生するスラッジのコンクリート用材料への有効利用
	工学研究科	教授	大観 光徳	(有)村岡オーガニック	波長変換機能を有する農業シートを用いた花卉栽培に関する研究
	農学部	教授	松村 一善	JA 鳥取県中央会	POS データを用いた農産物直売所の商品構成分析
	農学部	准教授	片野 洋平	日南町役場	学生調査を通じた過疎地域活性化の試み
	農学部	教授	明石 欣也	鳥取県園芸試験場	とっとりスイカのブランド強化に向けた機能性成分の分析システム開発
	農学部	教授	美藤 友博	大山乳業農業協同組合	ビタミン強化乳製品の開発および商品の品質管理に関する研究
H30年度	連合農学研究科	教授	児玉 基一郎	(株)サンバック	地域資源“二十世紀梨葉ポリフェノール”の活用による新規製品の開発
	農学部	准教授	田中 裕之	株式会社チュウブチュウブグリーン研究所	芝草品種の DNA 解析
R元年度	地域学部	講師	白石 秀壽	株式会社稲田本店	清酒業界における市場創造と販路開拓の研究
	工学部	准教授	増田 貴則	鳥取県栽培漁業センター	ストレスホルモンを用いた魚類飼育環境評価手法の確立
	農学部	教授	山本 定博	株式会社大協組	焼却灰固化製品の試作およびリン吸着試験
	工学部	助教	三浦 政司	株式会社アクシス	IoT プロトタイプ開発環境を用いたフィジカルコンピューティング学習教材の開発

#### IV. 事業進捗状況／鳥取大学

として学生を参加させて実施するもの。

学生が、共同研究を行う企業等に一定期間出向いて研究活動を行い、当該企業等の業務内容や職場環境を体験・理解することを通じて、自らのキャリアビジョンを形成し、当該共同企業等を始めとする県内企業等への就職意欲を喚起する。

##### 〈実績件数〉

平成 28 年度 10 件  
 平成 29 年度 11 件  
 平成 30 年度 2 件  
 令和元年度 2 件

#### ③グローバル展開のためのインターンシップ

鳥取県等と協働して実施している「地域協働型インターンシップ」のメニューに平成 30 年 4 月より「長期・有償型インターンシップ」を追加し、留学生が参加しやすい環境を整備を整備した。また、鳥取県や JETRO 鳥取と協働し、「留学生のための合同企業説明会」に参加した留学生のアフタフォローにも努め、インターンシップへの参加を促した。また、留学生に県内の企業を知ってもらうことや、日本の就職活動について理解を深めてもらうため、平成 30 年度よりシャトル便による留学生の県内企業訪問も開始した。(令和元年 12 月時点累計：訪問企業 5 社、延べ参加留学生 63 名)。

#### ・留学生参加実績（地域協働型インターンシップ）

実施年度	参加留学生	研修先（業種）
H28 年（夏期）	鳥取大学（工）3 年生	(株) Asuka-kei (IT 企業)
H29 年（夏期）	鳥取大学（工）1 年院生	大山乳業農業協同組合（食品製造業）
H30 年（夏期）	龍谷大学（農）3 年生	(株) ラークコーポレーション（サービス業）
//（夏期）	環太平洋大学（教）4 年生	プリリアント・アソシエイツ（株）（食品製造業）
//（春期）	米子工業高等専門学校 2 年生	東亜ソフトウェア（株）（IT 企業）
R 元年（春期）	鳥取大学（工）3 年生	(株) LASSIC (IT 企業)、(株) アクシス (IT 企業)



【(株) 鳥取メカシステム訪問】



【(株) プライセン鳥取センター訪問】



【(株) 旺方トレーディング訪問】



【(有) 日中東北物産】

- 留学生の県内定着促進のための連絡会（2019. 12. 16）

概要：各機関の活動を調整し協働で留学生の県内定着を促進する体勢を整備  
今後の情報共有と活動の連携を確認。

参加者：鳥取県（雇用政策課）、JETRO 鳥取、鳥取県産業振興機構とっとり国際ビジネスセンター、本学国際交流センター・キャリアセンター

COC + 推進室

〈留学生のための就職説明会・ガイダンス実施（2019年）〉

【主催：鳥取大学国際交流センター】

- 外国人留学生のための就職ガイダンス（2019. 9. 4～9. 11）

概要：鳥取市環日本海経済交流センターが主催するインターンシップ事業。外国人留学生の地域社会や地元企業への定着・活躍を目的とし、宿泊型就業体験を行う。～参加留学生 9 名

内容：①キャリア教育と就労支援講座（1 日）  
宿泊型インターンシップ（1 週間）

- 鳥取県との合同企業説明会（2019. 11. 1）

概要：鳥取大学において、留学生と県内企業とのマッチングの機会提供（協力：鳥取県雇用政策課）～参加留学生 15 名

- 留学生のための就職セミナー（2020 年 1 月 30 日）

概要：日本企業で働く鳥取大学留学生 OB・OG（3 名）による日本ビジネス社会での体験談を講話

～参加者 41 名（内留学生 26 名）

④地域就業論

■科目開設の趣旨

鳥取大学では、平成 23 年度に「鳥取大学における『社会的・職業的自立に関する指導等（キャリアガイダンス）』実施のための全学的指針」を定め、1 年生全員に「キャリア入門」を履修させているほか、「就業体験学習」、「社会人入門—社会が求める人材」、など、「キャリア科目」と呼ばれる科目群の



【留学生のための就職セミナー】

充実化をはかっている。

また、平成 25 年度より鳥取県内の産官学で「地域協働型インターンシップ」を新たに立ち上げ、早い段階から県内産業界への理解促進と職業観・就業意識の醸成を図り、卒業後も地域の社会と産業を担う中核的人材として確保し育て上げるための取組を進めてきた。平成 27 年度からは鳥取県インターンシップ推進協議会を設立し、鳥取県外の学校に在籍する学生にも広くインターンシップへの参加を呼びかけるなど、産官学一体の体制でインターンシップの推進を図っているが、インターンシップは、一事

#### IV. 事業進捗状況／鳥取大学

業所あたりの受入可能人数に限りがあるなど、県内産業界への理解促進と職業観・就業意識の醸成を図る面では限界もあった。

一般に、地方の中小企業は、都市部の企業や大企業と比較して先入観や情報の不足等により、学生から消極的に捉えられがちである。この状況は、地方への人材定着に取り組みうえて、大きな課題であり、学生一人ひとりのキャリアデザインに歪みを生じさせる恐れをはらんでいる。また、もともと地方に肯定感をもつ学生であっても、地方で「働く」ことや「暮らす」ことを実感として捉え、具体的行動に結びつけていくための有益な情報が乏しい状況もある。

そこで、どのような学生であっても、地域の産業界に対して、事実・実態に根差した適正な理解と積極的な認識をもてるように教養教育の一環として「地域就業論」を平成27年度より開設した。履修数は、開講からの3年間は40名前後で推移してきたが、4年目から増加基調に転じ、令和元年度は、78名が履修した。

#### ■授業の実施概要

平成28年度より現在まで、次のような開講形態で実施している。

□ 1コマ(90分間)あたり2企業にご登壇いただく。

- ・学生に少しでも多くの地元企業の存在を知らしめ、理解を深めさせる。
- ・一企業あたりのご登壇時間を最大30分(正味25分程度)とし、ご登壇にかかるご負担の軽減をはかる。

□県内産業界の先進性や独創性等、魅力や活力を学生に向けてより訴求できるよう、お話しいただく内容をご検討いただく際のご参考として、業界横断的な共通テーマを設定。各ご登壇企業に、自社に該当するもの・学生に向けて訴えかけたいものを任意でご判断いただき、登壇時にそれらの具体的内容についてご紹介いただく。

#### 【共通テーマ】

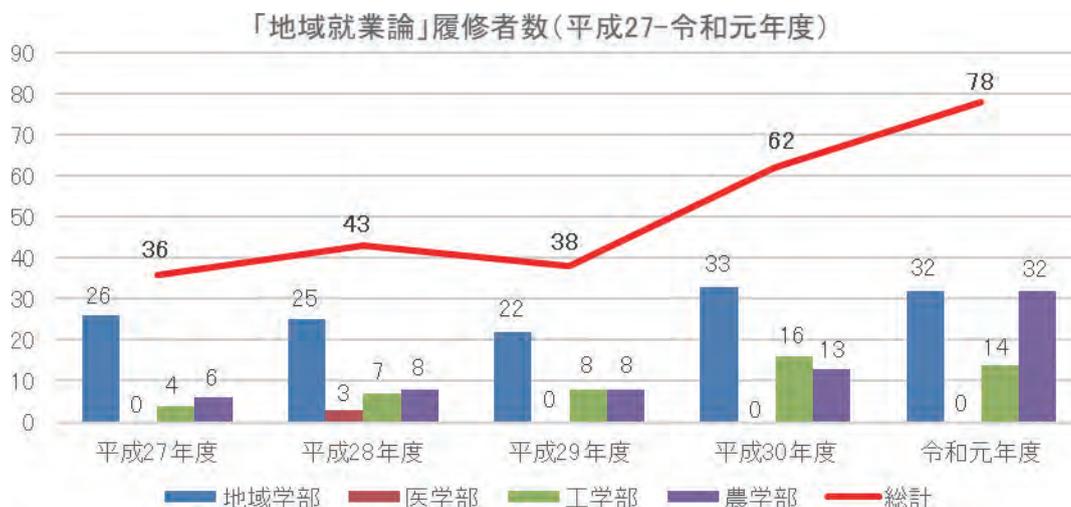
1. 「鳥取発！ナンバーワン！オンリーワン！」
2. 「鳥取から世界へ・鳥取で世界と勝負する」
3. 「地域社会を支える・つなぐ」
4. 「新しい鳥取の魅力を創る」
5. 「わが社の人材育成、ワーク・ライフ・バランス支援」
6. 「鳥取県で暮らす魅力とは」
7. 「本学卒業生からのメッセージ」

□授業の終盤(約25分間)に、ご登壇企業(ご登壇者)と学生との間のインタラクティブなコミュニケーション・タイムを設定。

・ご登壇企業(ご登壇者)と学生とが「生の声」や「ホンネ」をまじえたコミュニケーションを行うことで相互理解を深め、それぞれの今後の取組等に活かすことをねらう。

#### ■令和元年度の実施内容

令和元年度は、10月～翌年2月までに、延べ27事業所・31名の経営者又は実務家にご登壇いただいた。また、インターンシップへの参加を促し、企業の方との直接的なコミュニケーションの機会を増



やす観点から、平成29年度より、例年11月下旬開催の『とっとりインターンシップ』合同企業説明会への参加及び事前ガイダンスを、授業に組み込み、県内産業界を理解する機会を拡大している。

授業時間の終盤（約25分間）に「コミュニケーション・タイム」を設定しているものの、授業が県内企業人からの「インプット」中心の座学になりがちのため、平成29年度より、2～3回の授業に特定の課題を設定したワークショップ形式を導入した。さらに、本授業が標榜する「インタラクティブなコミュニケーション」の実質化を目指して、現役学生と年齢が比較的近い若手社会人との交流の機会も開講2年目の平成28年度より設定しており、平成29年度からは、本学卒業生に限定しての「鳥大OB・OGと語ろう！とっとり就活応援交流会」と題して実施している。

〈ワークショップ開催実績〉

平成29年度	鳥取市 経済・雇用戦略課との協働による『『地元企業魅力発信広告グッズ そこせか』コラボ型ワークショップ』（計2回）
平成30年度	鳥取県 雇用政策課との「地域企業の魅力を学生目線で考えるー『地域就業論』×『学生記者』鳥大生合同ワークショップ」（計3回）
令和元年度	（公財）ふるさと鳥取県定住機構・鳥取県ふるさと人口政策課との「ワークショップ：『ふるさと鳥取応援アプリ』学生ヒアリング」（計2回）



大学広報誌の取材が入り、ご登壇いただいた2社の社長と授業後に記念撮影

(3) コーディネーター活動

平成28年4月より、鳥取県東部・中部・西部をそれぞれ担当する4名体制（1人は統括）でスタートしたCOC＋事業推進の地域連携コーディネー

(参考) 平成30年度・令和元年度の授業実績  
(平成30年度)

授業回	授業日	登壇企業
1	10月6日	(オリエンテーション)
2	11月1日	今後の授業の進め方と作り方
3	11月8日	とっとりインターンシップ2019春 合同説明会 事前ガイダンス (鳥取県中小企業団体中央会)
4	11月15日	「学生記者による県内企業の情報発信事業」@地域就業論①
5	11月22日	「学生記者による県内企業の情報発信事業」@地域就業論②
6、7、8	11月23日	「とっとりインターンシップ」2019春 合同説明会
9	12月6日	「学生記者による県内企業の情報発信事業」@地域就業論③
10	12月13日	・株式会社山陰合同銀行【銀行業】 ・山陰酸素工業株式会社【高圧ガス及び関連機器の卸・小売業、ガス供給設備設計・施工（建築材料、鉱物・金属材料等卸売業）】
11	12月20日	・株式会社アクシス【ソフトウェア、情報、教育】
12	1月10日	・マルサンアイ鳥取株式会社【食品品製造業】 ・株式会社バルコス【ハンドバッグ卸、小売業、自社企画開発】
13	1月17日	・株式会社さんれいフーズ【食品卸売業】 ・寿製菓株式会社【食品品製造業】 ・厚生労働省鳥取労働局【公務】
14	1月24日	・株式会社LASSIC【ソフトウェア業】 ・日本海テレビジョン放送株式会社【放送通信業】
15	1月31日	・大江ノ郷自然牧場グループ（有限会社ひよこカンパニー）【その他のサービス業】 ・ファミリーイナダ株式会社【電気機械器具製造業】
16	2月7日	「鳥大OB・OGと語ろう！鳥取就活応援交流会」

〈令和元年度〉

授業回	授業日	登壇企業
1	10月3日	・オリエンテーション
2	11月7日	・山陰酸素工業株式会社 ・株式会社バルコス
3	11月14日	・「とっとりインターンシップ2020春 合同説明会」事前ガイダンスとして実施（鳥取県中小企業団体中央会）
4	11月21日	・ワークショップ：「ふるさと鳥取応援アプリ」学生ヒアリング①として実施（（公財）ふるさと鳥取県定住機構・鳥取県ふるさと人口政策課）
5・6	11月23日	・「とっとりインターンシップ2020春 合同説明会」（於：白兔会館）に授業の一環として参加
7	11月28日	・株式会社鳥取銀行 ・大江ノ郷自然牧場（有限会社ひよこカンパニー）
8	12月5日	・株式会社山陰合同銀行 ・株式会社LASSIC
9	12月12日	・株式会社さんれいフーズ ・ファミリーイナダ株式会社
10	12月19日	・株式会社角屋食品 ・日本海テレビジョン放送株式会社
11	12月26日	・株式会社アクシス ・マルサンアイ鳥取株式会社
12	1月9日	・寿製菓株式会社 ・株式会社チュウブ
13	1月23日	・ワークショップ：「ふるさと鳥取応援アプリ」学生ヒアリング②として実施（（公財）ふるさと鳥取県定住機構・鳥取県ふるさと人口政策課）
14	1月30日	・「鳥取大学70周年記念講演会」の聴講に振替
15	2月6日	・「鳥大OB・OGと語ろう！とっとり就活応援交流会」として実施 株式会社アクシス（地域学部 OG） 大江ノ郷自然牧場（有限会社ひよこカンパニー）（農学部 OG） 株式会社ケイズ（工学部 OB） 株式会社コニシ（地域学部 OB） シンワ技研コンサルタント株式会社（工学部 OB） 株式会社鳥取スター電機（工学部 OB） 鳥取信用金庫（地域学部 OB） 西谷技術コンサルタント株式会社（工学部 OB） 株式会社ホテルセントパレス倉吉（農学部 OB） 株式会社明治製作所（工学部 OG） 米子瓦斯株式会社（地域学部 OB） 株式会社LASSIC（農学部 OG） 流通株式会社（地域学部 OG）

ターチーム（以下、コーディネーター）は、まず、業務用携帯電話や自治体・企業等へ訪問する際のCOC＋公用リース車の設置（東部・西部のみ）、遠隔地となるコーディネーター同士がフェイス・トゥ・フェイスで情報交換できるパソコンでのスカイプ会議を設置する等、事業推進体制を整備、工夫した。その課程で公用リース車を使用して企画した「企業見学シャトル便」や「大学研究紹介パネル展」は、全国的に注目されたオリジナルなコーディネーター活動であり、年々活動の幅も広がっていった。

事業協働先へ出かける際の、COC＋事業紹介のパンフレットやチラシを作成し、企業等への勉強会に参加するとともに、地方創生の出前講義等も手掛けた。さらに、学生7名をCOC＋事業の学生サポーターに任命し、企業見学シャトル便への参加勧奨やレポート作成等の他、COC＋の学生への浸透に協力を得た。地元の若手経営者5名による「鳥取未来トーク」を皮切りに、鳥取県経済同友会と協働した学生と経営者の「地元企業の魅力発信」をテーマとしたCOC＋セミナーの取り組みも開始した。

平成29年度は、各学部の教員の協力も得ながら、専攻等を単位としたバスによる企業見学シャトル便も開始し、その後、この取り組みに県も協働するようになる等、企業と学生のマッチングツールとして機能を発揮した。シャトル便での企業見学感想レポートはCOC＋ホームページへ掲載したほか、毎年の風紋祭（鳥取大学学園祭）で、レポートのパネルを展示して、広報に努めた。「県内の高校から県内高等教育機関に進学した学生の約7割が地元で就職している」というデータを基に、県内高等教育機関への進学率を高め、地元就職率向上に繋げることを目的に高大連携事業の一環として「大学研究紹介パネル」を開始した。

当初は、鳥取大学のみのパネル展であったが、その後、鳥取短期大学、鳥取看護大学、公立鳥取環境大学も参加し、その規模は年々拡大するなど、COC＋事業を軌道に乗せた。

平成30年度は、コーディネーター3人体制に縮小する一方で、地域ニーズ窓口活動の一環として、事業協働機関と学生がタイアップして新商品の開発に取り組んだ。鳥取大学農学部発「白バラいちごあ

いす」や、鳥取大学農学部フィールドサイエンスセンター産の安納芋を使用した「とりりんのお芋シュー」を開発し、ローソンの中四国店舗1,300店で販売するとともに、県知事へ報告する等して情報発信に努めた。学生にとっては、地元企業と協働して新商品に企画、マーケティング、製造、販売まで手がける貴重なPBL学習の体験をすることができた。

平成31—令和元年度は、国庫補助終了後の事業継承をにらんで、コーディネーター1名体制として、従来の活動を継続させながら「大学研究紹介パネル展」の拡充の他、実務家教員の発掘、地域協働型インターンシップへの参画、各種シンポジウムへの参画、留学生の地元定着等の活動に取り組んだ。「大学研究紹介パネル展」は県内18の高校で開催し、大学のユニークで実践的な研究内容やキャンパスライフについて実感できる内容としたこともあり、アンケート結果からは県内大学志望に手応えを感じた。

#### 【各地区の概況】

##### （東部地区）

鳥取大学、公立鳥取環境大学とも、入学生の8割強が県外出身の学生である。県内出身の学生も含め、地元企業の内容をほとんど知らないのが状況であった。比較的に県内出身者が多い鳥取大学地域学部は、公務員、金融関係への就職人気が高い。鳥取大学工学部の学生は、約半数が大学院へ進学することもあり、製造業、建設業等の人材確保が難しくなっていた。しかし、両大学とも、最近2～3年間は、COC＋事業が奏功し、鳥取県への愛着や県内企業の理解が促進され、県外出身の学生の県内就職が増加し、県内出身学生の県外就職者数を超える状況も見られる。

##### （中部地区）

鳥取短期大学は、昭和46年開学以来「地域と共に」の理念のもと地域との関わりを大切にしており、地元高校生を多く受け入れてきた。学生の7～8割が県内出身者であり、そのほとんどが県内の保育施設や一般企業での就職を希望し、定着している。鳥取看護大学は、平成27年に開学し平成31年3月

に第1期の卒業生を輩出した。その就職者の9割が鳥取県内にとどまり、看護師、保健師として従事している。両大学とも就職・進学をサポートするため、学生一人ひとりに対して個別面談で進路の希望を聞き、履歴書・面接指導など、きめ細かい支援を行ってきた結果、就職率も年々向上してきた。

(西部地区)

米子工業高等専門学校は、県内出身学生が80%強を占めるが、県内企業からの求人数が県外企業からの求人数に対し約5%と少ないこと、また、県内企業の学生に対する認知度・知名度が低いこと等か

ら県外企業への就職率が高かった。この対応として、平成28年度～令和元年12月までに県内企業への企業訪問を重点的に実施し、インターンシップ、オープンファクトリーの受入先、就職先の開拓を行った。特に県内企業との産学連携を強め人材の受け皿のみでなく、地域活性化のため県内企業に対し米子高専振興協会への加入を勧め、新たに45社が入会した。また、学生へ県内企業の情報を提供するために地域のケーブルテレビ局と連携してデジタルサイネージを校内に設置し常時企業情報を流すようにする等、学生の県内企業への関心を高め、県外への学生流出に歯止めをかける活動をしてきた。

○コーディネーター活動延べ件数  
(平成28年4月～令和元年年12月)

件数

集計分	H28年度計	H29年度計	H30年度計	R1年度(～12月)	累計
学外会議イベント	148	105	108	78	439
来訪先	97	87	79	21	284
訪問先	292	246	208	101	847

鳥取大学	H28年度計	H29年度計	H30年度計	R1年度(～12月)	累計
会議イベント	53	41	37	78	209
来訪先	35	15	31	21	102
訪問先	172	135	98	101	506

短大・看大	H28年度計	H29年度計	H30年度計	R1年度(～12月)	累計
会議イベント	36	27	24		87
来訪先	40	31	25		96
訪問先	47	39	58		144

米子高専	H28年度計	H29年度計	H30年度計	R1年度(～12月)	累計
会議イベント	59	37	47		143
来訪先	22	41	23		86
訪問先	73	72	52		197

○訪問先件数(ネット件数)：平成28年度～令和元年度(～12月)

	H28年度	H29年度	H30年度	R1年度	累計
鳥取大学	78	68	70	61	277
短大・看大	20	33	53		106
米子高専	47	50	38		135
計	145	151	161	61	518

IV. 事業進捗状況／鳥取大学

○鳥取大学のコーディネーター活動年表（セミナー、イベント、他）

平成 28 年度（2016 年度）		平成 30 年度（2018 年度）	
10 月	「風紋祭」参加 ～誘致企業紹介パネル展、「鳥取未来提言」入賞作品展 ・協賛企業：マルサンアイ鳥取（株）	6 月	「2018 とっとりインターンシップフェスティバル」 ～とっとりインターンシップでチャレンジの夏にする?? ・鳥取県立産業体育館
10 月	「元気な若手経営者が鳥取を熱く語る」 ～若手経営者 5 名によるパネルディスカッション ・（株）AXIS、（株）バルコス、（株）旺方トレーディング、（株）ひよこカンパニー、モルタルマジック（株）の経営者による本音トーク	7 月	「鳥大発『白バラいちごあいす』完成報告会」（学長、 県知事） ～鳥取大学農学部生と大山乳業とのコラボ新商品企画・製作 ・ローソン中四国店舗（1,300 店）にて発売
1 月	「学生と経営者による鳥取未来トーク」 ～基調講演並びに学生と経営者が語る地元企業の魅力発信 ・鳥取県経済同友会と共催 ◇企業見学シャトル便（延べ数）～14 社、65 名	8 月	「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業シンポジウム」開催 ～COC + 事業の FD 活動の一環として開催。基調講演（岐阜大、徳島大）と県内各高等教育機関から COC + 事業進捗を発表。
平成 29 年度（2017 年度）		10 月	「風紋祭」参加 ～企業見学シャトル便（Part II）約 400 名来場 ・協賛企業：大山農業協同組合、マルサンアイ鳥取（株）
4 月	「COC + 出前授業」 ～地方大学と地域社会：人口減少社会における地方大学の役割 ・COC + シニアコーディネーター（講師）	10 月	「金融機関における女性の働き方」 ～地元 4 金融機関職員と学生のパネルディスカッション ・日本政策金融公庫鳥取支店と共催
6 月	「2017 とっとりインターンシップフェスティバル」 ～インターンで見つけよう！私の魅力、鳥取の魅力（トークショー） ・鳥取県立産業体育館	11 月	「鳥大発『とりりんのお芋シュー』完成報告会」（学長、 県知事） ～鳥取大学 COC + 学生サポーターと大山乳業とのコラボ 新商品企画・製作 ・ローソン中四国店舗（1,300 店）にて発売
7 月	「COC + 出前授業：米子高校社会人講座」 ～大学での学びと地方創生、進路の選択としての大学 ・入学センターと協働	2 月	「とっとりインターンシップフォーラム」 ～基調講演並びに企業と学生による壇上ミニトーク ・鳥取大学
7 月	「COC + 学生サポーターによるシャトル便活動紹介」 ～サポーターによる訪問企業の紹介 ・鳥取大学振興協会総会	3 月	「学生と経営者による鳥取未来トーク」 ～3 大学の学生と経営者との本音トーク ・鳥取県経済同友会と共催 ◇企業見学シャトル便（延べ数）～35 社、200 名
10 月	「風紋祭」参加 ～企業見学シャトル便活動報告パネル展 約 365 名来場 ・協賛企業：マルサンアイ鳥取（株）	令和元年度（2019 年度）	
10 月	「COC + 出前授業」 ～少子高齢化の現状と地方大学の役割（COC + 事業の推進に向けて） ・COC + シニアコーディネーター（講師）	6 月	「2019 とっとりインターンシップフェスティバル」 ～とっとりインターンシップでチャレンジの夏にする ・鳥取県立産業体育館
11 月	「鳥取を元気に！鳥取の魅力と底力」 ～教育界、金融界、実業界の経営者によるオンラインからナンバーワンへ！、小さくても勝てる！	10 月	「風紋祭」参加 ～学生による COC + 事業活動（シャトル便、学生記者） ・協賛企業：大山農業協同組合、マルサンアイ鳥取（株）
1 月	「地域をつなぐ挑戦！」 ～ルールは人と人とを繋ぐ、地域活性化装置。壮大な SL 走行社会実験。 ・山田 和昭氏（元若桜鉄道代表取締役社長）	10 月	「金融機関職員のワークライフバランス」 ～5 金融関係機関職員と学生のパネルディスカッション ・日本政策金融公庫鳥取支店と共催
2 月	「学生と経営者が語る地元企業の魅力発信」 ～学生と OB、経営者が地元企業の魅力を探る ・鳥取県経済同友会と共催 ◇企業見学シャトル便（延べ数）～28 社、144 名	1 月	「インターンシップ推進フォーラム」 ～地方のインターンは若者の期待に応えられているか ・鳥取県インターンシップ推進協議会と共催
		2 月	「学生と経営者による鳥取未来トーク」 ～3 大学の学生と経営者との本音トーク ・鳥取県経済同友会と共催 ◇企業見学シャトル便（延べ数）～21 社、116 名

① 県内企業見学シャトル便の運用

学生が授業時間の合間を利用し、見学したい県内企業を訪問できる「県内企業見学シャトル便」を創設した（2時間コース・半日コース・一日コースの3コース）。全学年、全学部を対象とし、学生が県内にどんな企業があるのかを知り、経営者から直に話を聞く事で、就活意欲の醸成や、キャリア形成の一助にも繋がっている。学生からの申込みを受け、コーディネーターが企業へのアポイントや見学内容等を設定し、COC+専用車で訪問するものである、

平成30年度からは、留学生シャトル便も開始し、魅力ある県内企業と一緒に訪問している。最近では、ふるさと鳥取県定住機構と協働でバスを利用したシャトル便運航にも注力しており、今後も協働開催していく予定である。参加した学生からのレポートをまとめ、COC+のホームページにおいて発信し、他の学生へ県内企業情報の周知に努めている。2016年の開始以来、訪問先企業数（延べ数）は98社、参加学生数（延べ数）は525名となっている（2020年2月末時点）。

**気軽に県内企業見学COC+シャトル便をご利用下さい！**  
 鳥取大学ならではの企画です！魅力が一杯！稼働中の企業を見に行きませんか？  
**授業の合間にご希望の企業にご案内致します。**  
 学部・学年は問いません。就活にも活用下さい。ご連絡をお待ちしています。

運行時間帯	東部コース(鳥取市周辺)	中部コース(倉吉市周辺)	西部コース(米子市周辺)
	大学発 大学着	大学発 大学着	大学発 大学着
	1時限: 8時30分～10時15分	午前: 8時30分～12時15分	終日: 8時30分～16時30分
	2時限: 10時30分～12時15分	午後: 12時45分～16時30分	
	3時限: 12時45分～14時30分		
	4時限: 14時45分～16時30分		

参加学生の皆様は、「学生教育研究災害傷害保険」に加え、「学生教育研究賠償責任保険」あるいは、「大学生協学生総合共済の「学生賠償保険」に必ず加入して下さい。

連絡先: COC+推進室(地域価値創造研究教育機構内)  
 Tel. (0857)31-6028 担当: 沖  
 E-mail: coc-plus.office@ml-adm.tottori-u.ac.jp

【県内企業見学シャトル便チラシ】

企業見学シャトル便活動状況



【シャトル便活動状況の推移】



【COC+公用車とCOC+学生サポーター】



【大学広報誌「風紋」でシャトル便紹介】

IV. 事業進捗状況／鳥取大学



(株) 寺方製作所



(株) 三洋製紙



(株) 旺方トレーディング～留学生



(株) 気高電機～ふるさと定住機構協働



(株) ササヤマ



JA 鳥取中央（農協）北栄営農センター



大山乳業農業協同組合



(株) 山陰放送

②大学研究紹介パネル展（高大連携）

県内の高校からの進学者の約7割が地元へ定着していることから、県内高校から県内高等教育機関への進学者を増やすことが、結果として地元就職を増やすことにつながるものと考えられることから、平成28年8月に企画した「鳥取大学研究紹介パネル展」が県内高校において好評であったことを受け、平成30年4月より、鳥取短期大学、鳥取看護大学、公立鳥取環境大学の3大学も参加して、4大学による「大学研究紹介パネル展」を県内の各高等学校で開催している。

高校生に大学入学後に、どのような世界が自分達を待っているのか、大学で学ぶ学問や研究がどう世

の中に役立っているのか等々、大学での夢や進学のきっかけ作りに同パネル展を活用いただき、併せて保護者へも大学で行われている研究の一端を紹介し、広くご理解をいただく趣旨で開催している。

「大学研究紹介パネル展」実施状況

年度	2017	2018	2019 (~Dec)
応募高校数	4 高校	7 高校	18 高校
パネル数	鳥取大学	98	84
	公立鳥取環境大学	—	21
	鳥取短期大学	5	17
	鳥取看護大学	3	8
計	106	130	526



【鳥取県立八頭高等学校にて】

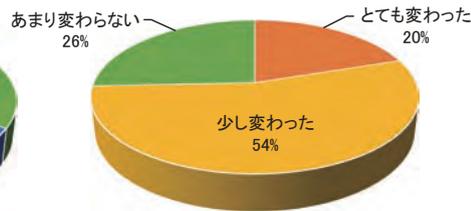


【鳥取県立倉吉西高等学校】

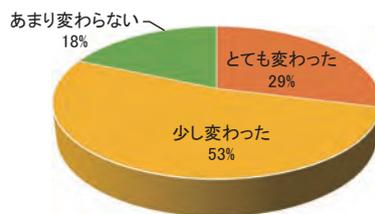
高校生からのアンケート  
回答(615名)



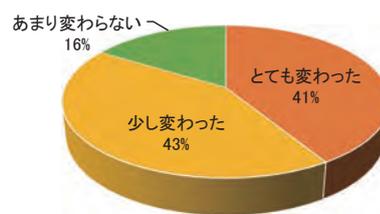
大学への関心  
1年生回答(206名)



大学への関心  
2年生回答(249名)



大学への関心  
3年生回答(160名)



とても変わった
  少し変わった
  あまり変わらない

\* 高校生からのアンケート結果 (2019 年度)

〈高校生からのアンケート結果（抜粋）〉

- ・カニの殻で作られている新素材はもっと普及したらいいなと思った。
  - ・自分達の身近にある知らないことがたくさん知れて良かった。
  - ・奥深く研究がされていて大学は大変なところだと思った。
  - ・面白そうな研究がたくさんあり、早く自分もしてみたいと思った。
  - ・専門用語が多くて理解するのが難しかったけれど勉強になった。
  - ・世の中を良くしようと大学が工夫して研究していることが分かった。
  - ・興味深く難しいものを簡単に説明してくれていて面白かった。
  - ・大学ではどんな研究をしているのかあまり知らなかったがパネル展を通して具体的に知ることが出来て良かった。
  - ・外国とのつながり、留学制度が充実していていいと思った。
  - ・大学は難しいことばかりしていると思っていたが、意外と身近なことばかりで面白かった。
  - ・大学の研究パネルを初めてみて、面白い研究がたくさんあり読んでいて面白かった。
  - ・たくさん知らないことが知れた。グローバルについてかかれたパネルが印象的だった。
  - ・難しい内容が多くて読み解けないものがほとんどでしたが、それぞれが一生懸命取り組んでいることが分かりました。
  - ・専門的な研究ばかりと思っていたけど意外と身近なものにつながる研究が多く楽しめた。
  - ・県内の大学がどのような活動を行いどのように活躍しているのか一目で分かり良いと思った。またあまり関心のなかった分野の研究パネルを見ると面白く興味を持てた。
  - ・今まで大学の研究と聞いても想像がつかなかったが、パネルを見てどんな感じなのか分かった。
  - ・地域と環境と密接に関わった研究が多く興味深く感じました。
  - ・高校では習わないようなことがたくさん書かれていて面白かったです。
  - ・理解に時間のかかるパネルもあったけれど、グラフなどで分かりやすくしてあったのが良かった。
  - ・鳥取で行われている活動なのに自分の知らないことがたくさんありビックリした。
  - ・自分の興味、考えと一致するものがあった。
  - ・大学の研究って見る機会がないのでこのように見ることが出来て良かった。
  - ・自分の行きたい進路、学部についての内容がありとても面白かった。
  - ・鳥取砂丘でのエリザハンミョウの減少についてはニュースでも見たため興味をもって見たが表が多くあり分かりやすかった。
  - ・ガン転移の予防についてのパネルはRNAについては知っていたが、細かいところまで知らなかったので今回とても勉強になった。
  - ・「本当のグローバル人材育成とは」という議題のパネルに興味を湧いた。
  - ・多くの国との交流が出来るという点にとっても興味がわいた。
  - ・色々な大学がそれぞれ独自の取り組みをしていたので、もっと調べたくなった。
  - ・過回転を防止することに簡単に壊れにくいような構造にするために、いろいろな事を試しておられて凄いと思った。
  - ・自分が一番味を持ったのは、鳥取短期大学の国際文化交流学科で、いろんな国の人と交流することで他国との違いや共感が分かり、絆が深まりとても良いと思いました。
  - ・電気について詳しくかかれていて良かったと同時に、詳しくすぎて良く分からないところもあった。
  - ・面白い研究でした。子供の脳を研究したパネルに興味をわいた。
  - ・もっと大学のことを知りたくなりました。
  - ・興味深い内容がたくさんあり、虫のことや身近な環境のことについて調査してあるものが印象に残っている。
  - ・いろんな研究や学習について詳しく書かれていて良かった。私自信大学に対する関心がとても高まった。
- 等々。

③地域ニーズ窓口

A. 大山乳業農業協同組合とのコラボ製品開発

・平成 29 年 7 月に、同組合から学生のアイデアで鳥取県産品を使用した乳製品の新商品開発のプロジェクトが打診された。平成 30 年の夏から秋を目指して、中四国のローソン店舗（約 1,300 店舗）に新商品を並べるというプロジェクトであり、学生グループを第 1 班（農学部学部生・院生 4 名）のアイスチームと、第 2 班（COC + 学生サポーター 7 名）のスイーツチームで組成しスタートさせた。同組合の製造部門の担当者からの講義や、ローソンの中四国担当者を招いたマーケティングの講義を受けた後、学生自らが、原材料の決定から味覚の決定、製造、パッケージデザイン、販売までを担当し、COC + 事業の「小さな事おこし、事はじめ」を実践出来たプロジェクトであった。PBL 教育の一環として実施したプロジェクトであった。新商品の完成時には豊島学長、平井鳥取県知事へ報告し、販売開始日には、学生達がローソンの制服を着用し、販売の体験もすることが出来た。参加した学生からは「自分達が味覚の決定から、パッケージまでデザインした新商品を何万人もの人達が舌鼓を打ってくれると思うととても夢のあるプロジェクトであり、いい体験が出来た」との感想であった。



【ローソン担当者を招いての企画会議①】



【同上②】

・第 2 班（農学部学部生・院生 4 名）のアイスチームは、鳥取県産いちご“紅ほっぺ”を使用した鳥取大学農学部発「白バラいちごアイス」を製作し好評であった。



【大山乳業（協組）本所工場を見学】



【大山乳業本所：試作室にて】



【プロジェクト企画会議】



【同上】

#### IV. 事業進捗状況／鳥取大学



【平井鳥取県知事へ報告】



【豊島学長へ報告】



【ローソン鳥取大学前店にて】



【ローソン鳥取大学前店にて】

- ・第2班（COC＋学生サポーター7名）のスイーツチームは、鳥取大学産の“安納芋”使用のシュークリーム「とりりんのお芋シュー」を製作した。



【鳥取大学圃場にて安納芋の収穫】



【大山乳業本所：試作室にて】

#### B. 自治体との協働事業

鳥取県が公募する「若者広聴レンジャー」、「学生記者」、「とっとり県民参加の森づくり推進事業」、「令和新時代創造県民運動推進補助事業」等の採択を受け、外部資金を活用しながら学生の県内定着促進に繋げる取り組みを実施し、更に県の翌年度の政策企画へ繋げている。

#### ○学生記者による県内企業インタビュー





○とっとり県民参加の森づくり推進事業による林業体験合宿の企画



○若者広聴レンジャー事業による県内企業訪問



#### ④ COC + 事業広報活動

##### A. 「風紋祭」(鳥取大学学園祭)への参加

・COC + 事業の広報を目的に、風紋祭に参加し、鳥取市に進出した誘致企業の紹介コーナーと、若手アーティストによる“鳥取未来提言”のパネル展示”を企画・実施した。来場者試飲用に誘致企業のマルサンアイ鳥取(株)からは、自社製品の豆乳をサンプル提供いただくなどした結果、2日間で150名の来場があった。2年目からは、企画見学シャトル便を利用した学生の企業訪問レポートのパネルにより、鳥取のオンリーワン企業を紹介し、風紋祭の定番イベントとなった。

平成 28 年度 風紋祭～平成 28 年 10 月 8 日 (土)～9 (日)：来訪者 150 名

##### ○「誘致企業紹介コーナー」

- 1) 今井航空機器工業 株式会社 (航空機部品製作)
- 2) マルサンアイ鳥取 株式会社 (豆乳製品製造)
- 3) 株式会社イナテック (自動車部品製造)
- 4) 株式会社 源 吉兆庵 (和菓子製造)
- 5) 共和薬品 株式会社 (薬品製造)

##### ○「鳥取未来提言」パネル展

平成 28 年 4 月～5 月にかけて地元紙である日本海新聞に掲載された、地元の高校生、大学生、若手アーティストらによる鳥取未来提言のパネル (50 点) を一堂に集めて展示。

IV. 事業進捗状況／鳥取大学



【みらいととトリパネル展～未来への提言】



【(株) 源 吉兆庵】



【マルサンアイ鳥取(株) 提供の豆乳試飲】



【マルサンアイ鳥取(株)】



【今井航空機器工業(株)】

平成29年度 風紋祭～平成29年10月7日(土)～8(日) 来報者：365名

- 「県内企業見学シャトル便レポートパネル展」
- ・平成28年11月から運行を開始した「県内企業見学シャトル便」に参加した学生の感想をまとめたレポートをパネルにして県内企業を紹介した。



【(株) イナテック】



【企業見学シャトル便パネル展】



【企業見学シャトル便パネル展】



【企業見学シャトル便パネル展 (Part II)】



【とりりんも見学】



【レバノン留学生の絵画展とコラボ】

令和元年度 風紋祭～平成 31 年 10 月 13 日 (日)  
来報者：約 550 名

- 「学生による COC + 事業活動～県内企業見学シャトル便と学生記者による県内企業報告 (2018～2019)」
- “梨葉茶” (鳥取大学大学院連合農学研究科児玉基一郎教授開発) の試飲会コラボ開催



【マルサンアイ鳥取 (株) からの豆乳試飲コーナー】

平成 30 年度 風紋祭～平成 30 年 10 月 7 日 (日)  
来報者：360 名

- 「県内企業見学シャトル便」レポートパネル展 Part II」 来場者：約 350 名
- ルネサンス風絵画展 (レバノンよりの工学部研究生) とのコラボ開催



【企業見学シャトル便レポート①】

IV. 事業進捗状況／鳥取大学



【企業見学シャトル便レポート②】



【COC + シャトル便パネル展・正面】



【学生記者によるの企業レポート】

⑤ COC + セミナー

学生の県内就職への意欲醸成とキャリアビジョン形成、経営者と学生の接点づくりを目的として、平成 28 年度から各界の講師を招き開催した。

平成 28 年度

○第 1 回 COC + 事業セミナー「若手経営者がく

鳥取の未来を熱く語る」～本音トーク～

・平成 28 年 10 月 26 日（水） 於鳥取大学 共通教育棟 2F（A21 教室）

講師 山本 敬氏（(株)パルコス代表取締役）  
坂本 哲氏（(株)AXIS グループ代表取締役 CEO）

幸田 伸一氏（(株)旺方トレーディング代表取締役）

小原利一郎氏（有）ひよこカンパニー代表取締役）

池原 正樹氏（モルタルマジック（株）代表取締役）

・県内で注目されている若手アントレプレナーに「鳥取の魅力と未来への夢」を筋書きのない本音トークで語っていただき、大学生を中心に中学生、高校生、一般の方々で約 350 名参加。



○第 2 回 「学生と経営者が語る地元企業の魅力と発信」～基調講演 山本隆弘氏（元全日本バレーボール選手）

・平成 29 年 3 月 14 日（火） 於ホテルニューオータニ

- ・参加者 約40名
- ・11名の学生（鳥取大学8名、公立鳥取環境大学3名）と地元企業（30社）の経営者が、鳥取の企業、実社会の疑問等について対談形式で意見交換を行った。



平成29年度

○第1回 「小さくてもオンリーワンからナンバーワンへ」

- ・平成29年11月26日（月） 於鳥取大学 共通教育棟2F（A21教室）
- 講師 石浦 外義氏（鳥取城北高等学校校長 相撲部総監督）
- 兼子 明氏（マルサンアイ鳥取㈱代表取締役社長）
- 船山 学氏（日本政策金融公庫鳥取支店 支店長）

- ・参加者約130名
- ・地元の教育界、産業界、金融界でリーダーとして活躍されている講師3名が、鳥取の持つ潜在力を示しながら、鳥取の地でオンリーワンからナンバーワンとなるようになるために実践されていることをご講演いただいた。



○第2回 「地域をつなぐ挑戦！」

- ・平成29年11月26日（月） 於鳥取大学 共通教育棟2F（A21教室）
- 講師 山田 和昭氏（前若桜鉄道社長、津エアポートライン営業企画部 システムエキスパート）

- ・参加者 220名
- ・マーケティングの手法を使った若桜鉄道の立て直しや、単なる輸送手段ではなく、地域をつなぐ血管・血流として、バラバラの地域を1つにまとめる鉄道の力や自分の夢を実現するためには思い込みや視点を変える事の必要性を学んだ。

IV. 事業進捗状況／鳥取大学



・FD (Faculty Development) 活動の一環として、優れた成果を上げているCOC+大学の教員による講演会と県内高等教育機関からの講師によるCOC+事業進捗状況報告を各教育機関の関係者が一堂に集まり、相互理解を深めることができた。



平成30年度

- 「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業シンポジウム」
  - ・平成30年8月8日（水） 於鳥取大学 共通教育棟3F 約80名
  - ・主催：鳥取大学COC+教育プログラム開発委員会
  - ・講師：益川浩一教授（岐阜大学：演題「次世代地域リーダー育成プログラムによる地域志向人材の育成」）、  
玉真之介教授（徳島大学：演題「新たなインターンシップの開発を目指して」）

- 「学生と経営者による鳥取未来トーク」  
～学生と経営者が地元企業の魅力を探る
- ・平成31年3月15日(金) 於ホテルニューオータニ
- ・参加者 21名
- ・普段から感じているお互いの疑問等についてグループ討議形式で意見交換会を行い。学生からは「経営者へ直接質問が出来、会社の強みや思い、学生に求められているもの等直接生の声で聞けて良かった。」「経営者からの話を聞き、地方創生に向けた事業をしたい。」等、学生の就職意識の醸成とキャリア形成に奏功するセミナーであった。



令和元年度

- 「金融機関職員のワークライフバランス」
- ・令和元年10月25日(金) 於鳥取大学共通教育棟 C51
- ・日本政策金融公庫鳥取支店と共催
- ・学生に、金融業界との接点を持つ機会を提供し、

地元定着の促進と金融業界への関心を持ってもらうことを目的に開催。地元金融機関関係の職員職員5名と鳥取大学、公立鳥取環境大学の学生4名が登壇し、大学生はじめ高校生、一般社会人など、約95名が聴講した。

- ・金融機関関係職員には、学生時代から就職への志望動機、就職後から今、そして将来への展望を語っていただき、日常業務や仕事後の時間の使い方、週末の家族や自分のための時間の過ごし方等々、語っていただいた。学生パネリストからは、「一口に金融機関と言っても、働き方改革にはいろいろな取組みがあり、副業も充実させながら金融機関に勤めている職員もいらっしゃるなど、貴重な話を伺え良かった」との声があった。



⑥ COC + 学生サポーター

平成28年11月に、COC + 事業の活動をする中で、いかに情報を学生達へ有効に繋げるか、また学生からのホットなニーズをどう汲み上げるかということに対して、一緒にCOC + 事業をサポートして

#### IV. 事業進捗状況／鳥取大学

くれる学生を募集した。1年生対象の授業でコーディネーターが呼びかけたところ数名が手を上げ、その後、その核となる学生の輪から5名の「COC+学生サポーター」が誕生した。2年目は、入学式のパンフレットの中に、「COC+学生サポーター」募集のチラシを入れたところ1名の学生が応募し、その学生の友人1人も参加してくれた。結果、COC+事業終了まで、7名の学生サポーターとともに、COC+事業を活動することができ、事業遂行に大いに貢献してくれた。

活動の一端は以下のとおりである。

##### ○企業見学シャトル便への参加とレポート編集

学生が授業時間の合間を利用し、見学したい県内企業をコーディネーターが公用車で訪問する企画である。授業が空いている学生サポーターが同行し、帰学後、感想レポートを参加学生からまとめてCOC+HPへアップするもの。学生サポーターが県内企業や経営者を深く知る機会となった。



##### ○風紋祭（大学学園祭）へのスタッフ参加

毎年10月に開催される風紋祭にCOC+推進室がイベント参加しており、企業見学シャトル便で作成したレポートのパネルを展示した（50枚前後）。企業からの製品サンプルの提供も受け、学生サポーターと共に運営し好評であった。



##### ○鳥取大学振興協力会総会での発表

学生サポーターの存在と、その活動を企業の経営者に広く知ってもらうため、鳥取大学振興協力会総会の後に、活動と訪問先企業のレポートを報告した。大勢の経営者の前でプレゼンする手法も学ぶことができた。



##### ○インターンシップフェスティバルへのスタッフ参加

平成29年から毎年6月に開催されている同フェスティバルへスタッフとして参加した。平成30年の同フェスティバルでは、学生サポーターの一人が「開会宣言」の役目を果たす等、活躍した。



○大山乳業農業協同組合とのコラボ新製品の開発

同協同組合から、地元の産物を使用した新商品開発に学生アイデアを活かしたいとのオファーがあり、COC + 学生サポーターチームで、鳥取大学で産出する安納芋を使ったシュークリームを製作した。学長報告、県知事報告の後、中四国地方のローソン店（1,300店舗）で販売された。PBL教育として貴重な体験だった。



○経営者との鳥取未来トーク

平成28年度から毎年、鳥取県経済同友会と共済で、「学生と経営者が語る鳥取未来トーク」を開催している。就職を控えた鳥取県内の大学生と経営者が直接語り合う座談会であり、学生同士も他大学の学生の意見を聞くことのできる貴重な機会である。学生サポーター達も積極的に参加してくれた。



## 公立鳥取環境大学

### 1 COC+事業総括

公立鳥取環境大学では、平成27年に独自のCOC事業として、「麒麟の知（地）による学生教育プログラムの開発・展開」が採択され、同年採択されたCOC+事業と並行して進めてきました。その目的は、学生教育において単なる普遍的原理のみを教授するのではなく、その応用や顕在の場である地域、特に大学の所在する鳥取県東部地域を題材にして学んでもらうことで、学生に個々の専門知識を基礎とした実践力を身につけてもらうことでした。同時に、身につけた深い洞察に基づいた学生の「地域への愛着」の醸成にも期待しました。この教育プログラムには、卒業後に「地域についての深い見識と課題に対して能動的に対処する実践力を持つ有為な人材」として、鳥取県に残ってもらいたいという大学の希望も反映されています。

個々の地域には固有の自然や歴史、そしてそれらを基とした伝統や文化、産業、人の暮らし（社会）があります。それらは地域が位置する“場所”に伴うものであり、唯一無二の地域資源といえます。鳥取には鳥取固有の地理的条件があり、人々はこの地で暮らすための様々な知恵を発達させてきました。その知恵も時代や技術の進歩などと共に変化せざるを得ません。この「場所に結びつき変化する様々な知恵」を“在来知”（地域の自然環境に根差した、文化、社会、経済、技術、暮らし方などの根底に流れる独自の知）と定義し、大学のもつアカデミックな知（専門知）からみた鳥取県、特に東部地域（この地域で伝わる独特の獅子頭（麒麟の頭）に基づき「麒麟地域」と名付ける）の在来知と現在の課題を、学生自らが体験を通じて学習・発掘・研究するカリキュラムを開発し、実施してきました。

具体的には、COC関連科目群として、座学や実習形式で学ぶ「地域志向科目群」、地域で動ける自分をつくる「キャリア教育科目群」、そして少人数PBL科目として実施し、実際に麒麟地域の現状や課題を体験する「麒麟プロジェクト研究」（全学部1、

2年時必修）を設けました。これらを主に1、2年次に学修することで、3年次以降の各学部専門教育につなげ、最終的に卒業研究としてまとめることで、学生個々がそれぞれ独自の「地域の専門家」になってもらおうとしたのです。さらに一定のCOC関連科目数を履修した学生の中から、論文審査により、麒麟地域に関する深い知識とこの地域に貢献できる可能性のある学生を「TUES 麒麟マイスター」として認定し、それを応募条件とした学生の研究費助成制度「麒麟特別研究」も設けました。

令和元年度には、学生が主導して地域のステークホルダーと対話する場である「麒麟学生コミュニティ」の試行運用も開始するほか、平成30年に岩美町の大谷地区に「岩美むらなかキャンパス」を開所してこの地域での学生活動の足場とし、また、「まちなかキャンパス」で平成27年より開始した、学生による中高生の学習支援「カンスタ（環境大スタディ）」も、5年間の活動を通してすっかり定着しました。

日本、いや世界各地から鳥取のこの地に集い、学んでいる本学の学生たちは、この地の在来知、つまり“麒麟の知”を深く学びます。この学びには地域社会との連携が不可欠であり、これらのカリキュラムを経て、鳥取に愛着を持ち、鳥取の地を人生の舞台として考えてくれる学生が一人でも多く輩出できれば、鳥取県、麒麟地域の活性化にもつながると考えています。

本事業の立案・実践・展開に際しましては、麒麟地域の皆様をはじめ、幅広い皆様方からご指導とご支援を賜りましたこと、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## 2 活動実績

### (1)「鳥取学」-「麒麟プロジェクト研究」-「麒麟の知」

公立鳥取環境大学のCOC事業「麒麟の知（地）による学生教育プログラムの開発・展開」において、「この地域の在来知と現在の課題を、学生自らが体験を通じて学習・発掘し、身につけた環境学と経営学の専門知を用いて再定義（解析）する。」ことをカリキュラム主目的としている。そのために、経営

学部と環境学部の全1年生配当の必修科目として平成28年度より、「鳥取学」を開講している。この科目において全学生は、鳥取の気象、地質・地形、海況、陸域と海域の生物相について学ぶとともに、鳥取の歴史と文化についても体系的に学習する。15回の講義のうち1回は平井伸治・鳥取県知事が担当し、現在の鳥取県の現状と施策、そして課題や将来構想などを講義している。県外出身学生にとってのみならず、鳥取県出身の学生にとっても鳥取県を深く学び直す機会となり、全講義を終えた学生からは、「鳥取県の見方が変わった。」との声も多い。この鳥取学は、1、2年生次に全学生が必修科目として受講する、地域連携型の少人数PBL科目「麒麟プロジェクト研究」の基礎であり、いわば「事前学習に相当する。さらに、平成30年度より3年生配当科目（選択）として「麒麟の知」を開講し、麒麟プロジェクト研究を担当した複数の教員により、学生が経験したプロジェクト研究について、専門的な解説を加える。この「鳥取学」-「麒麟プロジェクト研究」-「麒麟の知」の一連の科目を、それぞれ「事前学習」-「体験型学習」-「事後学習」とすることで、本学のCOCカリキュラムの幹としている。全学必修科目（「麒麟の知」のみ選択）としていることから、学生の受講率は100%となる。

以上のように、地域に存在する伝統や知識を発掘するための観察眼を養い、これを論理的思考と専門的知識により裏付けるという一連の過程を経験することにより、全学生の鳥取への愛着や社会との繋がりを育み、この地域への定着意欲を高めることが期待される。



【麒麟プロジェクト研究（太田プロ研・学外活動）】



【「鳥取学」平井・鳥取県知事による特別講演】



【「麒麟の知」の授業風景（太田准教授）】

## (2) 地域協働によるキャリア教育活動

公立鳥取環境大学では、平成24年4月の公立化後、1年・2年生にはキャリア教育科目「キャリアデザインA（1年生）」「キャリアデザインB（2年生）」を必修化し、社会人基礎力の養成や大学生に必要な学習技術などについて学ばせている。

「キャリアデザインA」では、まず初めに、初年次教育の一環として、これまでの高校等での学習方法とこれから学ぶ大学での学修の違いを学ばせ、更に今後、大きく変革していく社会で正解の無い課題に取り組むことの意味や、自身で考える力の育成を目指している。また、聞く、話す、書くといったコミュニケーションの基礎に触れ、新聞の読み方や読書の重要性などについても学び、自律ある社会人として成長していける能力を身につけさせている。この科目を入学直後の1年生前期に学ばせることにより、学生が卒業後の人生を自ら考え、そのうえで専門教育を学修していくことの重要性を意識させている。また、働くことへの興味関心を抱かせることにも注力しており、授業内で地域企業との協働により実施している1年生から履修できる「基礎イン

#### IV. 事業進捗状況／公立鳥取環境大学

ターンシップ」への参加も促し、実際の働く現場に出向き、社会人と関わることで得られる知識や経験、また地域産業にも目を向けるよう促している。

「キャリアデザインB」は、「キャリアデザインA」や「基礎インターンシップ」で学修した「働くこと」に関して、より興味や理解を深めることを目的としている。本科目では、地域で活躍する経営者や企業関係者、行政機関などから、多様な経験を積んできた方をゲストスピーカーとして招いている。ゲストスピーカーの多様な働き方や仕事経験の講演を聞き、社会と職場、働き方などに触れ、今後の職業選択を考える能力の養成を目指している。鳥取県内の企業や県内で活躍する経営者をゲストスピーカーに招くことは、学生が鳥取県内の産業や企業を知る大きなきっかけになるため、6次産業化で多くの観光客を集客している「大江ノ郷自然牧場」の経営者や、地域経済を支える地方金融業の「山陰合同銀行」、地域活性化に大きな役割を持つスポーツクラブ「ガイナレ鳥取」などを招いてきた。実際に現場で働く人の考えや思い、役割などに触れることで、卒業後の就職を考えるときに、自身の労働力がどのような形で社会に貢献されるのか、働くことで達成させたい目標は何なのかを考えさせる、気づかせる機会となっている。

このように、学生のキャリア形成に関する教育を地域と協働で実施することは、職業観を養成させるだけでなく、県内外出身問わず、地域産業の理解や地域人材としての役割を考えさせる上で効果があり、2019年3月卒業生の鳥取県内就職者（54名）の内、鳥取県外出身学生は22名となった。

#### (3) 地域に密着した社会体験と職業意識の醸成

学生が地域に役立つ人材に育つためには、早い機会に地域社会に接し、社会体験を行い、地域社会の実情を知ることが重要であると考えられる。そこで公立鳥取環境大学では、平成28年度より、学生が県内企業に直接接し、地域に関心を持ち、実体験を積むことによって、自らが目指す人材に育つための準備を行うことを目指した特別演習「地域社会体験学習」という科目を設けた。本科目は株式会社SC鳥取の協力を得て、SC鳥取が運営するプロサッカー

チーム「ガイナレ鳥取」のホームゲームに関わる会社業務の一端を学生が担い、課題や現状、経営の考え方を理解するプログラムとし、具体的には、事前学習においてSC鳥取の現状を学んだ後、ホームゲームの前日準備と当日業務の一端を担い、体験の後、報告書作成と発表会を行う、というものであった。一連の活動により、学生は次のことができるようになった点がプログラムの成果である。(1) 地域社会に参画する社会的なマナーを習得できた。

(2) 自ら実施した活動を振り返り、次につなげることができた。(3) 関係者と効果的なコミュニケーションをすることができた。(4) 体験を通じて経営の課題を理解し、自発的に考えることができた。

また、これまでの本プログラムへの参加者は下表のとおりであり、受講者のレポートの中から学生の声を抜粋して示す。

年度	2016		2017		2018		2019	
学期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
受講者(人)	13	3	20	13	9	11	14	17

- ・将来の職業について考えることができた。地域の人の顔が見えて、交流ができる仕事につきたい。そのためにはコミュニケーション能力が必要だと思うので、力をつけていきたい。
- ・初めての環境や仕事でも、前向きな姿勢で取り組み、スムーズに業務に溶け込めることがわかった。
- ・我々はサッカーゲームやイベントの出来上がったものしか見ていないが、その裏には、たくさんの仕事や苦勞があることがわかった。
- ・物事を運営するには、必要な業務を細分化し、人



【ホームゲーム当日における業務の一部】



【業務終了後のミーティング】

をどう配置し、組織としてどう機能させるか、考えないといけないことがわかった。

#### (4) 地域の中高生の学習支援活動「環境大スタディ（カンスタ）」

公立鳥取環境大学では、平成27年1月より、教職課程（中学校および高等学校の理科教諭）の履修学生（3、4年生）を中心として、鳥取駅前の「まちなかキャンパス（まちパル鳥取3階）」において、毎週水曜日の18時30分から20時まで、地域の中高生を対象とした学習支援活動（通称カンスタ）を行っている。これはCOC事業「麒麟の知（地）」による学生教育プログラムの開発・展開において、科目外の地域貢献活動であると同時に、将来の教員となる人材の教育技術向上を図る目的がある。本学の教職課程専任教員が見守る中、1回あたり平均で10人の学生たちが協働的に工夫しながら、訪れた生徒たちが持ち込むさまざまな教科に対応している。

この中で彼らは普段の大学内での学習では得られない実際的な技術を習得している。地域の生徒たちも、自分と年齢の近い大学生が親身になって教えてくれる環境を好んでいて、多くがリピーターとなり、約5年間の活動で延べ2,000人近くの生徒がカンスタに学習しに来ている。学習だけでなく、さまざまな悩みや雑談も、大学生や生徒たちにとっては大切な学びの場となっている。

この活動で鳥取の中高生を通じて、本学の教職課程履修生は、現在の鳥取のさまざまな情報、問題、知識を得ることもあり、これらの結果として、県外出身学生であっても鳥取への親近感や愛着が醸成されつつある。参加した学生の1人は、「カンスタで

の私たちは、中学生や高校生に勉強でわからないところを教える立場ですが、同時に教員をめざす私にとっては『どうすれば伝わるのか』等、いろいろなことを考えさせられる場にもなっています。カンスタは、生徒と大学生がお互いに切磋琢磨しながら成長していける、そんな場だと思います」と述べている。

#### 《環境大スタディの参加生徒・対応学生数の推移》

区分・年度	H27 <sup>※</sup>	H28	H29	H30	R1 <sup>※</sup>	計
参加生徒数	48	525	583	384	380	1,920
対応学生数	89	380	410	208	202	1,289

※平成27年度は1月～3月末の3か月間、令和元年度は4月～12月末までの人数



【地域中高生の成長に情熱を注ぐメンバー】



【和やかな雰囲気に包まれた学習支援の様様】

#### (5) 「とっとり麒麟地域活性化プラットフォーム」の運営

公立鳥取環境大学では、大学が進める地域連携・貢献活動をより効果的・積極的に行うため、圏域の自治体及び関係団体の協力を得て、地域連携組織「とっとり麒麟地域活性化プラットフォーム」をCOC事業以前に設置（平成26年6月）している。

#### IV. 事業進捗状況／公立鳥取環境大学

この「麒麟地域」とは、鳥取県東部地域（鳥取市、岩美町、若桜町、智頭町、八頭町）と兵庫県の新温泉町を含む地域一帯（1市5町、）で、「麒麟獅子舞」など独自の文化を共有・伝承してきたことから、「在来知」を共有するこの地域を「麒麟地域」として設定しているもので、本学、自治体、協同組合及び経済団体等がより一層連携を深め、一体となって地域の活性化及び発展を図ることを目的としている。

公立鳥取環境大学は、自ら地域活性化のための取り組みを企画提案するとともに、1市5町及び関係団体からの依頼・要請・提案を受けて、地域課題解決のための新たな取り組みを模索し、育んできた（令和元年12月末までに全体会議を6回開催）。

平成27年度に「地（知）の拠点（COC）」大学として認定を受けて以降は、構成自治体や関係団体から各地域における各種振興事業の紹介やその課題の検討、インターンシップ事業の紹介など、地方・地域・大学が抱える諸問題へのアプローチ手法などについて情報・意見交換を定期的に行っており、第6回（令和元年11月26日）開催に際しては、本学の地域連携コーディネーターによる連携シーズの事前ヒアリングや、会議後にはあらためて地域連携

推進会議の開催に向けた意向調査を行うなど、より忌憚なく・より細やかな対応・共同実施へとシフトしつつある。

〈主な報告事項、協議事項等〉

- ・本学の麒麟地域内での活動状況
- ・鳥取県の人口減少とその対応に関する検討
- ・大学と連携した空き家の利活用について
- ・地域おこし協力隊の活動報告と課題
- ・高齢化・過疎化時代を支える情報サービスと若者向け雇用機会の提案
- ・その他、課題解決のための連携に関する情報提供・共有、意見交換 など

#### (6)「岩美むらなかキャンパス」を開所 研究・地域連携活動の拠点を拡大

平成30年4月16日（月）、鳥取県東部の日本海岸沿いに位置する岩美（いわみ）郡岩美町大谷（おおたに）地区に「岩美むらなかキャンパス」を開所し、同日開所式を行った。

この「岩美むらなかキャンパス」は、地域活性化を図ることを目的として、平成26年度に本学と「公共交通の活用に関する協定書」を締結するなど協力関係にある日本交通株式会社（鳥取市、大阪市）の澤志郎代表取締役から提案と支援を受けて、同社の創業者で故・澤春蔵氏の生まれた地にある築60余年の古民家を改修・増築したもの。この改修・増築には、本学学生の研究活動や地域連携活動等が円滑に進むように様々な配慮が設計からなされ、本学はその古民家を無償で借り受け、「キャンパス」とし



【地域活動に学生団体も参画】



【公開講座・出張「英語村」を通じた地域・大学間交流】

て使用を始めた。

開所式では、江崎学長から「豊かな自然と、人と人との温かいつながりが息づいているこの岩美町で、学生が成長する場を与えられたことはとても素晴らしいこと」と挨拶。学生代表も「このキャンパスを“拠点”としての利用だけではなく、地域との架け橋となるような活用を目指したい」と謝辞を述べた。

開所以来、教員・学生による岩美町をフィールドとした調査・研究拠点としての活用のほか、同町まちづくり協議会や商工会と学生との意見交換会の開催、学生の地域活動への参加、地域・地区の方を対象とした公開講座や英語を楽しく学ぶことができる「英語村」も本学キャンパスから同町の学校に出張するなど精力的に連携・交流事業を展開し、利用者数も平成30年度が367人、令和元年度（12月末時点）は563人と、開所以降延べ1,000人を超える見込みとなっている。

本学は引き続き、この「岩美むらなかキャンパス」をJR鳥取駅前に開設している「まちなかキャンパス」と同様に、地域の方々や自治体・各種団体の方々、学生や教職員が集う拠点、調査・研究や情報交換などの地域連携を深める拠点として、その活用範囲を拡げていく予定である。

#### （7）「TUES 麒麟マイスター認定制度」と「麒麟特別研究費助成制度」を創設、運用開始

令和元年7月29日（月）、本学が指定するCOC関連科目（地域志向科目群、キャリアデザイン科目など）を修了し、鳥取県東部及び兵庫県北西部を中

心とする「麒麟地域（鳥取市・岩美町・若桜町・智頭町・八頭町・新温泉町）」に関する知見を有し、かつ地域活性化に係る活動や研究に意欲的に取り組む学生を認定する制度として、「TUES 麒麟マイスター認定制度」を創設し、同日初めての認定証交付と、そのシンボルとなるロゴマーク最優秀者の表彰式を行った。

初年度に審査を経てマイスターに認定された学生は、3～4年生の12名。ロゴマーク最優秀賞者とともに互いの認定・採用を喜びあう中、今後の一層の活動・活躍を誓っていた。

また、「TUES 麒麟マイスター」の認定を受けた本学生を対象に、学術的かつ地域のニーズに応じた研究活動（環境学部：卒業研究、経営学部：専門演習3）に係る一部費用について、審査を経て助成する「麒麟特別研究費助成制度」も合わせて運用を開始。地域への成果の還元が期待される研究課題4件を採択した。



【認定証交付式後の記念撮影】



【学内公募から採用されたロゴマーク】

※ロゴマーク作成者によるデザイン解説

コンセプトは「麒麟の地に大木を育む」です。「麒麟」は地域そのものを示しています。そしてその一番のシンボルである角は、その場所で成長する樹木を表しています。その樹木のような地域が持つ可能性というものを学生たちの知恵や活動によってより大きく形のあるものにしていくことができればという願いを込めて、このロゴマークのデザインを行いました。

【(8) 地域と学生をつなぐ場の創出に向けて～「麒麟学生フォーラム」への展開～】

公立鳥取環境大学では、事業最終年度（令和元年度）以降の目標として、大学の持つ専門知や新たに得られた地域に関する知見の地域との共有を図り、かつ在学生と地域のステークホルダーとの交流の場として、「麒麟学生フォーラム」を学内に設けることを掲げている。

この「フォーラム」創設に向けては、まず学生が地域活動を行う場合の課題やニーズ（下記参照）を学生へのインタビュー等で把握し、学内スペースを活用した在学生間の情報交換の場として、「麒麟学

生コミュニティ」づくりから試行的に着手した。

この「コミュニティ」づくりに際しては、地域活動に豊富な経験を持つ学生（大学院生）を学生コーディネーターとして任命。有志学生7名とともに「学生地域連携活動ワークショップ」を積極的に開催（7回、10～12月末現在）し、(1) 学生運営による小規模なイベントワークショップの実施案、(2) 学生が日常的に集まり、地域活動の情報を取得できる場の整備案 などの検討を重ねている。

そして、令和2年1月23日（木）には、学生企画地域連携交流フォーラム「ろーこれ (Local Model Collection)」を先行開催することとなり、引き続き「麒麟学生フォーラム」創設へ向けて、本格展開を目指していく。

また、この地域に定住した卒業生と在校生の交流の場としての「麒麟塾」、地域住民・団体との交流の場としての「地域連携フォーラム」を設け、これらを通じて、本学の教育目的でもある「人と社会と自然との共生」を実現する有為な人材となるための知的基盤と、卒業後に鳥取県に定住して地域のリーダーとなるための人的ネットワーク基盤を全学生に付与し、鳥取県における有為な人材養成機能の強化を図ることを目指している。

《学生の地域活動に関する主な課題やニーズ》

- ・地域で活動をしたがきっかけがない
- ・どのような活動が行われているか情報共有の方法がない
- ・優れた活動が創設者の卒業などで継承されず、結果として地域の信頼を失ってしまう 等



【主体的・積極的なディスカッション】



【学生企画地域連携交流フォーラムのチラシ】

## 鳥取短期大学

### 1 COC+事業総括

平成27年度においては、地域志向教育科目として全学共通教養科目「山陰論」、キャリア教育特別科目として「インターンシップB」を位置づけ、平成28年度には地域志向教育科目「現代鳥取学」およびキャリア教育として「キャリアデザイン入門」を開講した。加えて平成29年度からは、地域志向教育科目に「現代鳥取研究」も開講し、鳥取県の地域や産業等の現状や課題について理解を深めるためのカリキュラムの充実を図った。各学科専攻においても地域の活性化をテーマに課題解決型の学習や学生制作作品の地域における展示、教育・福祉に関する学習成果の研究発表等を行う等、地域に密着しながら学びの発信を常時行っている。そして平成30年度には、「地域創生推進プログラム」を認定し、卒業生の4割となる113名に修了証書を授与した。この教育プログラムは本学の建学精神である「地域に貢献できる人材育成」および基本理念である「地域とともにある大学」の具現化としても今後期待される。

大学独自の事業としては、平成23年度から労働局と共同開催で実施している「鳥取短期大学就職説明会」を充実させ、平成27年度以降においても継続実施している。平成30年度からは「鳥取短期大学企業説明会」と名称変更して県内を中心とした企業のおよそ50社が参加する説明会となり、地元企業への進路支援を強化している。併せて、平成28年度からは、鳥取県内の保育者確保に向けて「保育学生のための職場説明会」を実施している。また、平成29年度からは、栄養士として従事する意識を高める目的で「栄養士のための企業説明会」を学内で実施している。さらに平成30年度からは、ふるさと鳥取県定住機構と共催で鳥取県内の保育園・幼稚園やこども園、施設等をコースに分かれて見学する「保育学生のための職場見学会」や「企業見学バスツアー」も実施し、県内就職者数の向上につながる取組みを行っている。加えて、県内のプロスポー

ツ選手やジュニアアスリートの栄養教育・栄養支援を行い、栄養に関する課題解決に向けた研究を行っている。

また、平成27年度以降、本学卒業生を雇用している企業および施設を対象に「キャリア形成支援教育に関する調査」を実施し、新卒者の状況、新卒者採用時に重視する力や態度、在学中に習得すべき力や態度について把握しながらキャリア教育に反映させている。併せて、卒業生を対象とした調査も実施して、卒業後の就職状況について把握している。

このように、地域を理解する教育の環境を整え、また地域における学生の活動の場を充実、拡大しながら地域もキャンパスとして地域と連携および密着しながらキャリア形成教育を行っている。鳥取県内就職率は、平成27年度は70.2%であり、以降毎年上昇して平成30年度は75%で推移している。今後の取組みとしては、「地域創生推進プログラム」の推進および検証、e-learning教材作成と活用、さらにはインターンシップ科目の充実がある。

さらに、学内で実施している各事業の継続と促進を図り、地域が求める人材育成に貢献していく必要がある。また、雇用主を対象とした質問紙調査についても質問項目を精査しながら今後のキャリア支援形成に活用していかなければならない。

## 2 活動実績

### (1) 高校パネル展（高校訪問）

平成28年度より平成30年度まで、COC+事業中部コーディネーターが鳥取短期大学および鳥取看護大学の教職員と一緒に、鳥取県内すべての高等学校を訪問し、進路指導部の先生方に対して「COC+事業」についての詳細な説明を行った。具体的には、本事業の目的である鳥取県内への地元就職率向上に向けた本学独自の様々な取組みや、鳥取県内におけるインターンシップの推進状況などを紹介した。

また、COC+事業として4大学が連携して取り組んでいる各大学の研究の取組みを紹介する「パネル展」の説明を行い、高校での開催を促した。さらに、各高等学校出身者の卒業生の進路状況、在学生の進路希望状況の報告も同時に行い、鳥取県内への

#### IV. 事業進捗状況／鳥取短期大学

若者の定着に向けた本事業の趣旨を説明する有意義な機会となった。これにより高校生の県内高等教育機関への進学が増え、地域で学び、地域にとって重要な人材が輩出できるよう、高等学校の教員の方々へも理解していただき浸透していければと考える。



#### (2) 「就職企業説明会」の開催

鳥取県内を中心とした企業と連携しながら、地元就職率向上のために「鳥取短期大学就職説明会」を毎年5月に本学を会場として開催している。この説明会は、鳥取労働局ハローワーク倉吉との共同開催で平成23年度より継続実施しており、平成30年度には「鳥取短期大学企業説明会」と名称変更し、参加企業はおよそ50社となっている。

学生たちは企業の採用担当者から企業概要、職務内容等について直接説明を聞き地元企業を十分理解したうえで採用試験に臨み、地元企業への内定を確かなものにしていく。この事業取組みは定着して、地元企業や関係機関の協力のもと、安定した地元就職の実績として表れている。なお、地元就職率の割合は、70%台で推移している。

#### (3) 「地域創生推進プログラム」の認定

「地域創生推進プログラム」の作成に取り組み、「地域志向教育科目」「キャリア教育科目」および「地域インターンシップ科目」の各科目群の中から2単位以上、合計6単位以上を修得し、かつ卒業要件を満たす教育プログラムを平成30年度に策定し



就職企業説明会



就職企業説明会

た。併せて、カリキュラムマップも作成した。

平成30年度においては、卒業生のおよそ4割が所定の単位を取得し、113名に「地域創生推進プログラム修了証書」を授与した。

地元就職・地元定着を促進する教育プログラムであるが、本学の建学の精神である「地域に貢献できる人材育成」と合致するものであり、この教育プログラムによってさらに地域創生を担う人材育成を具現化するものとして期待できる。

#### (4) 「保育学生のための職場見学会」の実施

平成29年度より、「保育学生のための職場見学会」を実施している。この見学会の目的は、保育士や幼稚園教諭として携わる施設を見学することにより保育業務への理解を深め、保育者としての職業意欲を高めるとともに、県内就職率向上を図ることにある。鳥取県内の保育園、幼稚園および認定こども園、施設等を5つのコース（鳥取県東部2コース・鳥取県中部1コース・鳥取県西部2コース）に分かれて見学をしている。県内の保育現場と連携を図りながら実施することで、特徴が異なるさまざまな施設を見学することができ、その現場に必要な専門的な知識・技能を認識する機会となっている。初年度には、本学幼児教育保育学科の学生37名と、鳥取大学地域学部人間形成コース16名の学生が参加した。

「地域創生推進プログラム」

鳥取短期大学 地域創生推進プログラム修了要件 (括弧内の数字は単位数)						
科目群	全体	国際文化交流 学科	生活学科 情報・経営専攻	生活学科 住居・デザイン専攻	生活学科 食物栄養専攻	幼児教育保育 学科
地域志向 教育科目 (PBL 等含む)	現代鳥取学 (2) 現代鳥取研究(2)	山陰地域フィールド 体験学習 (2) 地域交流 (1)	プロジェクト演習 (ビジネス) (1)	特別研究 (2)	調理学実習Ⅱ (1) 食品加工学実習(1) 教職実践演習 (栄養教諭) (2)	特別研究Ⅰ (1) 特別研究Ⅱ (1)
キャリア 教育科目	キャリア デザイン入門(2)	キャリア デザイン (2)	キャリア デザイン (2)		食生活論 (2)	
地域インターン シップ科目	インターン シップA (1) インターン シップB (1)	地域社会体験(1)	ビジネス 実務実習 (1)	学外実務実習(1)	給食施設実習(2) 栄養教育実習(1)	教育実習Ⅱ (2) 保育実習Ⅰ-1 (2) 保育実習Ⅰ-2 (2) 保育実習Ⅱ (2) 保育実習Ⅲ (2)

(5) 「保育学生のための職場説明会」および「栄養士のための企業説明会」の実施

平成 28 年度より、鳥取県福祉保健部子育て王国推進局、鳥取県社会福祉協議会・鳥取県福祉人材センター、鳥取県私立幼稚園・認定こども園協会の協賛のもと「保育学生のための職場説明会」を実施し、鳥取県内における保育者確保の促進を図っている。学生は、1 年次より参加して保育者としての職業理解および県内施設における就職意識を高めている。開催 4 回目となった平成 31 年度では、鳥取県内の市町村行政、社会福祉法人・学校法人等 42 施設の参加があり、県内における保育士養成校としての特

長ある事業の一つとなっている。

また、平成 29 年度からは「栄養士のための企業説明会」も実施しており、栄養士として従事する学生の意識を高めるとともに受託給食会社における県内栄養士就職の向上を図っている。

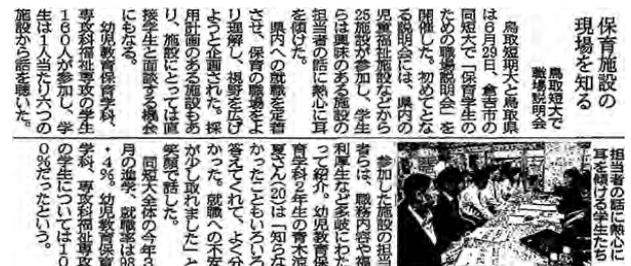
これらの説明会は継続実施しており、県内の保育者人材の確保、栄養士としての就職者数の向上につながっている。同時に県内施設および企業との連携も強化されている。



保育学生のための職場説明会



栄養士のための企業説明会



(出所) 日本海新聞 (2016 年 7 月 1 日)

## 鳥取看護大学

### 1 COC+事業総括

鳥取県内の高等教育機関（大学、短期大学、高等専門学校）が自治体や企業等と協働し、学生の雇用創出・地元定着を実現するという目的の元、本学では、各種機関と協働し、地域が求める人材育成のための教育の充実を軸に据え、①地域志向科目の充実、②キャリア教育の充実、③学生の就業希望を支援する雇用開拓実施と地区間連携・情報交換の実施、④地域づくり活動、企業活動などへの研究面での協力実施、⑤「まちの保健室活動」、地域の健康づくりリーダー養成講座「まめんなかえ師範塾」などの地域活動の充実、積極的に取り組み事業を展開してきた。

#### ①地域志向科目の充実

地域志向を育成する科目を「地域志向科目」（33科目）に指定し、教育内容の充実を図りつつ、授業を通して得られた地域理解を、地域の公民館でのフィールドワークや病院等での臨地実習、「まちの保健室」活動等への参加によって実践的経験として位置付けて教育実践を行った。また、「地域志向科目」間の教育内容・方法をリフレクションシートを用い、連携を図ることで、横断的な科目間の教育を意識することにつながった。さらに、地域志向科目に限定したカリキュラムマップを作成し、配点表に基づいて地域志向科目の学修成果を数値化できるよう検討した。学生と関わった地域の方や実習先の関係者を招いて学生自身の学習成果を発表する機会を設けるなどの教育実践を継続的に取り組んだ。また、学生全員が、授業で得た地域理解を、公民館でのフィールドワークや「まちの保健室」活動等への参加を通してさらに深め、健康や生活に焦点を当てた地域活性化の役割を果たす職業観と人間性の育成を推進する成果が得られている。

#### ②キャリア教育の充実

キャリア教育と地域インターンシップの一環とし

て、公民館、病院、施設での実習、「地域志向科目」・「まちの保健室」活動のフィールドを通して、地域の医療・福祉関係組織・団体との連携を強化し、職業的アイデンティティの育成を視野に入れた教育を継続し、特に、「実習教育会議」2回/年、「実習調整会議」3回/年等を通して臨地実習先の指導者との教育的連携を図り、教育に反映させた。

#### ③学生の就業希望を支援する雇用開拓実施と地区間連携・情報交換の実施

雇用開拓の実施と地区間の連携・情報交換の一環として、関連部署を中心に、臨地実習先との連携・情報交換を、実習先訪問や教育会議・実習調整会議等の実施により全学体制で推進できた。これにより、学生の就職希望を支援する雇用開拓と地区間の連携が推進される成果が得られた。さらに先進校への視察を通じ、支援の強化についても検討できた。

#### ④地域づくり活動、企業活動などへの研究面での協力実施

地域の健康づくりリーダーの育成事業も定期的実施されている。本学の「教育サポーター」として登録したボランティアは128名（令和元年12月現在）となった。また、地域志向科目および「まちの保健室」活動のフィールドとの連携を強化するとともに、臨地実習先の医療機関との調整・協力ニーズの把握を、実習先訪問や教育会議、実習調整会議を通じて全学体制で推進できた。これにより、研究面での協力要請にきめ細かく対応できる体制の構築と運用、課題の把握と改善につながった。

#### ⑤「まちの保健室活動」、地域の健康づくりリーダー養成講座「まめんなかえ師範塾」などの地域活動の充実

「まちの保健室」活動、健康づくりリーダー養成講座「まんなかえ師範塾」活動を通して全県展開の地域活動に取り組んでいる。毎年70回以上を開催しており、学生の参加人数は400を超え、全員が2回以上参加している。また本学で養成した地域住民の教育サポーターの「まちの保健室」事業への参加も年々増え、400名近くとなった。「まちの保健

室」を、1) 地域住民の健康に関する意識・相談の場、2) 地域の健康づくり支援システム、3) 鳥取看護大学生の学びの場として機能させ、地域住民および関連組織・団体と連携の中で地域の健康を支援することができた。学生がボランティアスタッフとして運営・実施に参加することにより、専門性を活かしたインターンシップ実習機能を果たすとともに、学生とともに地域の創造的環境を創出する成果が得られている。

## 2 活動実績

### (1) COC+講演会の開催

地域志向科目、キャリア教育の充実の一環として、地域で優れた取り組みを継続して実践している方々や、それぞれの分野での第一人者を講師に招き、学生を主対象とした講演会を、鳥取看護大学後援会との共催で開催している。学生たちは、これらの講演会を通して自身が目指す将来の看護師像を具体的に

思い描きつつ、「地域への思い」「看護への思い」をキーワードに、人々の健康と生活を支え、地域とともに歩む看護職をめざす者として、看護観を深め、地域に暮らす人々の健康や生活に焦点を当てた地域活性化の役割を果たす職業観と人間性を育てている。

### (2) 鳥取看護大学方式「まちの保健室」の推進

地域の健康づくりの推進、地域の組織との連携、学生の学びの場として機能することを目的として「まちの保健室」活動を推進している。乳幼児から高齢者まで幅広い年齢層の地域住民を対象とし、血圧や体脂肪率、骨密度などの測定に加えて、心身の健康、子育て、生活習慣病予防、介護、認知症予防などの不安や悩みをゆっくり語れる「場」と「機能」を提供するとともに、地域をフィールドとする教育研究活動として全学生がスタッフとして参加している。平成28年鳥取県中部地震後には、学生の提案により災害ボランティア「まちの保健室」in倉吉市役所をはじめとした支援活動も行った。コミュニ

#### 【COC+講演会 一覧】

日時	講師	テーマ
平成28年1月29日	畑田 純子 氏 三谷 貴子 氏	優れた実践者の語り～「まちの保健室」の実践を通して
平成29年10月2日	高田 久美 氏	優れた実践者の語り～在宅介護の実践から
平成29年1月27日	高原久美子 氏 矢口 隆啓 氏	優れた実践者の語り～「まちの保健室」の実践を通して
平成30年3月5日	宇都宮宏子 氏	地域で“暮らす”そして“生きる”に伴走する看護 ～つなぐ、かなえる、あなたの願い～
平成30年11月24日	南 裕子 氏	これからの看護を担う若者へ～地元からグローバルに発信できるナース!!
令和元年9月30日	玉置 妙憂 氏	死にゆくひとの心によりそう～終末期医療現場でのスピリチュアルケア～



【南 裕子氏 講演会より】



ケーション力の向上を課題とする1年次から、3年次には「ミニ講話」の実施、さらには地域の健康に対する意識を持って自身で企画・運営する力の醸成に向け、学生たちは段階的に学びを深めてきた。地域と連携できる活動の芽を育み、地域の人々の生活と健康を支えることに誇りと実践力をもつ看護職者

の育成を目指し、全学を挙げて取り組んでいる。

### (3) まめんなかえ師範塾事業

鳥取看護大学は、平成27年よりCOC+事業において、「地域貢献」活動として、「まちの保健室」と「地域の健康づくりリーダー養成塾」を行っている

【「まちの保健室」過去5年間の実施実績】

	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度 (~12月)
開催回数(回)	40	76	70	79	60
出務教員数(人)	228	272	214	253	176
利用者数(人)	1,392	2,308	1,990	2,511	1,369
学生参加者数(人)	135	355	477	464	258



【平成28年 鳥取県中部地震後の災害ボランティア「まちの保健室」in 倉吉市役所】



【3年生による「ミニ講話」】

る。「地域の健康づくりリーダー養成塾」では、地域の言葉で「元気になっていますか」を意味する「まめんなかえ」という言葉を、気軽に声を掛け合える「地域づくり」を目指し、「地域の健康づくりリーダー養成塾（まめんなかえ師範塾）」を開講している。

そして養成講座の修了生は、「まちの保健室」で、ボランティア活動を「大学」と「連携・協働」して行うシステムを作っている。そのため、鳥取看護大学では、「まめんなかえ師範塾」修了生が、「まちの保健室」でのボランティア活動が円滑にできるこ

【まめんなかえ師範塾 養成者数（期別と地域別）】

期	開催年月	会場	受講者数(人)	地域	市町村内訳
1	H28.3	看護大学	20	東部 33人	鳥取市 26
2	H28.8	看護大学	11		智頭町 2
3	H28.9	東部	10		八頭町 5
4	H28.9	西部	5	中部 80人	倉吉市 45
5	H29.3	看護大学	20		湯梨浜町 13
6	H29.7	東部	3		三朝町 8
7	H29.7	西部	5		北栄町 5
8	H30.3	看護大学	15		琴浦町 9
9	H30.8	看護大学	11	西部 15人	米子市 7
10	H31.3	看護大学	21		境港市 1
11	R1.8	看護大学	7		日吉津村 3
合計			128		伯耆町 2
					南部町 1
				大山町 1	
				合計 128名	14市町村



【修了者に授与されるバッジと看板】



【平井知事を囲んでの「まちの保健室」】

【エキスパートコース】  
それぞれの、知識・技術の専門を極め、新人の指導を行えることを目指します。  
各コースを取得すると、名札に、「**血压マスター**」と、取得コースの称号が記載されます。

3コース修得→

コース3	血压	血压 マスター H31.3月2名認定！！
コース2	骨密度	骨密度 マスター H31.3月3名認定！！
コース1	身長・体重 または 体脂肪	体脂肪 マスター H31.3月3名認定！！

【レベルアップコース】  
「認定まめんなかえ師範」(＝地域の健康づくりリーダーとして実践できる)を目指し、レベル1から4まで、階段を上るように学んでいきます。

レベル4	認定まめんなかえ師範 まち保健室がリーダーとして実施できる
レベル3	正しい知識を伝えることができる
レベル2	測定器を正しく使用でき、正しい測定が行える
レベル1	来訪者に対し、適切な対応ができる H31.3月12名認定！！

【ラダー式教育制度（エキスパートコースと、レベルアップコース）】

IV. 事業進捗状況／鳥取看護大学

とを目的に、修了生の活動支援を行う、教育サポーター人材バンクも設立している。さらに、「まめんなかえ師範塾生」の学習意欲の充足と、活動意欲の継続を目指し、平成30年度からは、ラダー式教育制度も開始している。

(4) 鳥取看護大学「地域志向科目」

「地域に貢献する人材の育成」を建学の精神に掲げる本学は、教育課程の中で特に「地域」を意識した33科目を抽出し、1年次から4年次まで段階的に地域理解を深める「地域志向科目」として位置付けた。さらに、これらの科目ひとつひとつが涵養する能力・資質について、知識・技術や行動力、傾聴・

発信力などの3分野11項目に配分したカリキュラムマップを作成し、地域志向科目を通じて身につけた力の可視化に取り組んでいる。「地域志向科目」を担当する教員は、自身が担当した科目ごとの「評価シート」を用いて、目標への到達度や課題、科目間連携、学修成果についてリフレクションし、次年度につなぐとともに、「地域志向科目」の科目間連携の状況を検証している。以上の取組を通して、1年次前から地域を意識した学びを通して地域観・看護観のベースを作り、そこから、地域社会の理解、地域での実践へと、緊密な科目間連携の中で「地域とともに歩む力」の育成を図っている。

※開設当初の教育課程による



【地域志向科目 相互関連】

			知識理解 状況把握力				主体性 実行力 課題発見力 論理的思考力				傾聴・発信力			
			地域志向科目の教育目標	地域の自然や文化・歴史・経歴・知恵について説明できる	地域社会の仕組みや人々の営みについて説明できる	言葉や行動の背後にある人々の思い、地域社会の人間関係等を理解できる	多様な情報を収集して地域社会での健康に関する具体的な課題と取り組みを説明できる	地域社会における課題を発見することができる	地域社会を尊重した課題解決のアイデアを企画立案することができる	その地域・組織に深く入り込み、自身の役割を持つて企画に関わることができる	複数のニーズや専門性を把握して課題解決のプロセスを企画することができる	自分の意見を分かりやすく伝えることができる	相手の意見を丁寧に聴くことができる	聴くことにより、相手に対する思いやりや想像力を持つことができる
基礎	1 山陰論	2 必	6	2	1	1								
	2 日本語表現演習	2 必										6	2	2
	3 手話	4 必		1	1	1						1	3	3
	4 公衆衛生学	2 必	3	3	2	2								
専門支持	5 社会福祉・社会保障論	4 必	3	2	2	2	1							
	6 人権論	4 選	3	2	2	2	1							

【地域志向科目 カリキュラムマップ (一部)】

# 米子工業高等専門学校

## 1 COC+事業総括

平成25年から始まった「地の拠点整備事業(COC)」に引き続き、平成27年度から5ヵ年事業として鳥取大学を始めとする鳥取県内の高等教育機関と連携して、「地の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」を実施し、これにより、地方公共団体や企業と連携して、学生にとって魅力のある就職先を創出するとともにその地域が求める人材を養成し、「ひと」の地域への集積を図ることで地方創生に貢献することを図った。

- (1) 本事業に対応するための「組織」、「教育」、「取組」は、以下の相関図に示す通りである。
- (2) 実施した主な事業は以下の通りであり、次年度以降も継続、ブラッシュアップしていき地域の求める人材の養成に貢献して行く。

地域協働教育の実践として、包括連携協力協定を結んでいる大山町をフィールドとして間伐材や空き家の活用を題材とした教育、JR大山口駅舎のデザイン提案等実施した。また、地域の企業技術者を実務家教員として招聘し、地域企業における仕事と技術に関して理解を深める授業を実施した。令和元年度は11名、延べ240時間の授業を計画している。

キャリア教育の充実として、地域企業に関する職業教育や講演会を実施した。①米子高専振興協会会員企業の従業員を対象にリカレント教育を実施した、また8～9月にかけて8件の講演会を実施した。②米子高専振興協会企業ガイドブックを作製し本

科3年生、専攻科1年生に配布し地域企業の情報提供を行った。③オープンファクトリーを本科低学年の学生向けのプレインターンシップとして位置づけ身近な企業を見学し、業務内容の理解や仕事における心構え等を学ぶ場として効果を上げた。当初は1～3年生の自由参加で行っていたが、H30年度より地域学として2年生全員参加(200名)とし企業15社を訪問し地元企業に対する理解を深めた。④米子高専のための進路研究セミナーを企業220社以上、地元自治体も参加して例年1月に実施し、直接企業から説明を受けることにより学生の進路決定の一助としている。参加は有料であるが、地域の振興協力会会員企業には参加費を無料とし参加を募っている。

学生の地元就職希望を支援する就職先開拓と地区間連携・情報交換の実施として、①教員やコーディネーターによる企業訪問を実施した。平成28年度～令和1年12月で延べ214社を訪問し就職先、またインターンシップ、オープンファクトリー受入先の開拓を行った。②地元ケーブルテレビ局と連携して校内にデジタルサイネージを設置し、地元企業の情報を放送し学生に情報提供を行っている。③コーディネーターが米子高専シーズ集(毎年発行)を活用し地域企業等の技術ニーズとのマッチングを行い、卒業研究のテーマとして取入れる地域協働教育を実施した。令和元年度は4件の共同研究に着手した。

今後も産官学連携の強化に努め、地域に根ざした人材確保により地域活性化を即す取組を行っていく。



## 2 活動実績

### (1) JR 大山口駅舎のデザイン

大山町と米子工業高等専門学校は、町の地域活性化と学生の研究活動の発展を目的として包括連携協力協定を平成 29 年に結んでいる。

本協定を活用し、大山町は同町を主体に建て替える JR 山陰線大山口新駅舎のデザイン案の作成を米子工業高等専門学校に依頼した。

米子工業高等専門学校では、COC+事業の一環としてこれに対応すべく、本校の建築学科学生を対象に、駅舎デザインアイデアコンテストを開催した。

学生 31 名 6 チームが応募し、平成 31 年 4 月に行われた審査の結果、最優秀賞には建築学科 5 年のグループが選ばれた。採用された案は「町の風景となる駅」をテーマとして、木材を多用した木の温もりが身近に感じられる外観とすることで大山らしさを表現している。大山町では「開放感のある明るく、優しく、温もりのある」新駅舎になると期待されている。その後も、町や設計者など関係者と学生が打ち合わせを重ねた。

新駅舎は、令和 1 年 9 月に着工し令和 2 年 3 月上旬に完成予定である。



最優秀賞作品



授賞式（最優秀賞を受賞した学生と大山町長）



交流会（大山町職員と学生）



打ち合わせ（大山町職員と設計者と学生）



(出所) 日本海新聞 (2019 年 4 月 16 日)

(2) オープンファクトリー

学生のキャリア教育の一環として、地域共同テクノセンターとキャリア支援室が連携して、夏季休業中にオープンファクトリーを実施した。

オープンファクトリーは本科低学年（1～3年生）の学生向けのプレインターンシップとしての要素を備え、米子高専振興協力会の県内会員企業を見学し、業務内容の理解や仕事における心構え等を学ばせる。この機会を通じて、将来の就職や進路を考える

きっかけを学生に与え、ひいては地元には優秀な技術者を確保することを主な目的としている。

さらに、平成30年度からのオープンファクトリーは、学校行事に格上げされ、第2学年全員が地元企業を見学することとした。学生アンケート結果でも「進路の参考になった」、「地元企業への理解が高まった」、「地元就職に対する関心が高まった」、「良かった」といった回答が多くを占めた。

【実績】

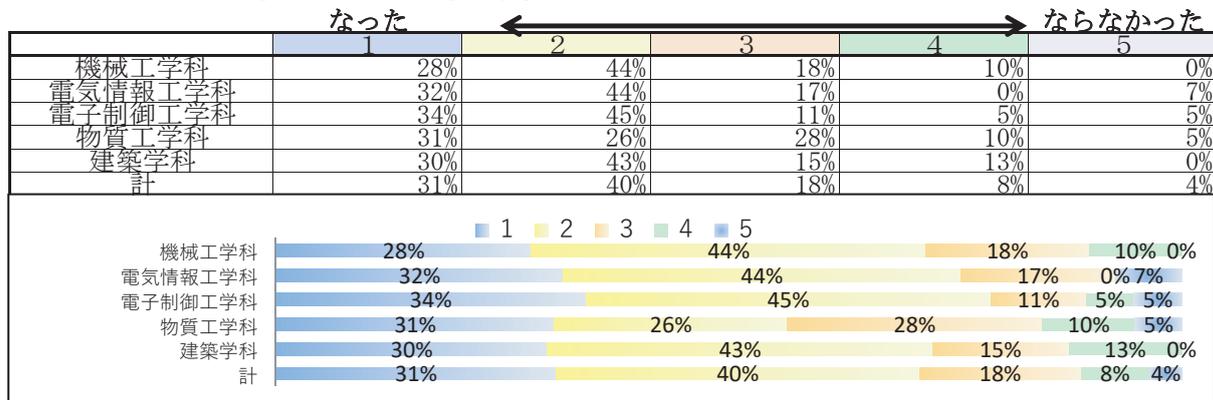
実施年度	実施期間	参加企業数	参加学生数 (実人数)	参加学生数 (延べ人数)
2015	H27. 9. 14～H27. 9. 18	28	57	157
2016	H28. 9. 12～H28. 9. 16	33	48	181
2017	H29. 9. 11～H29. 9. 15	45	76	359
2018	H30. 10. 18～H30. 10. 19	16	208	666
2019	R1. 10. 17～R1. 10. 18	16	199	597



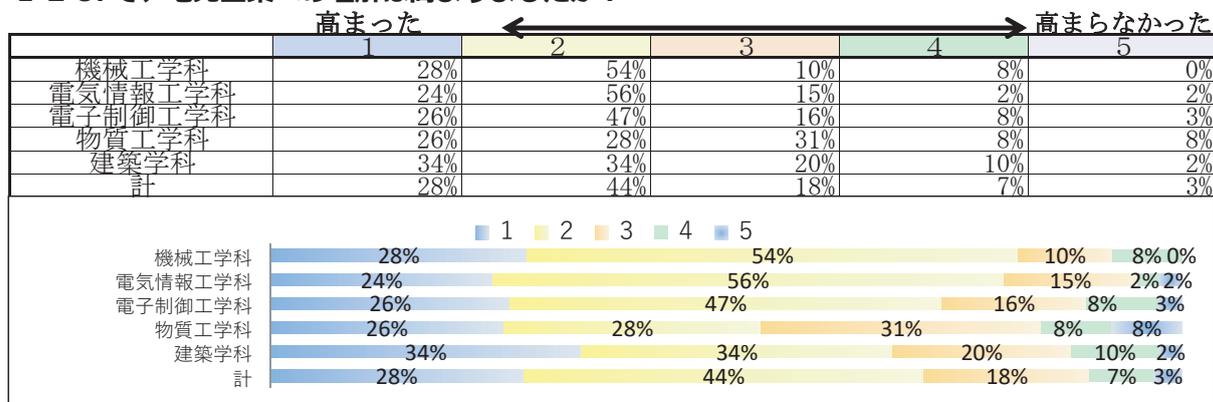
IV. 事業進捗状況／米子工業高等専門学校

\*令和元年度 オープンファクトリー 終了後学生アンケート (集計)

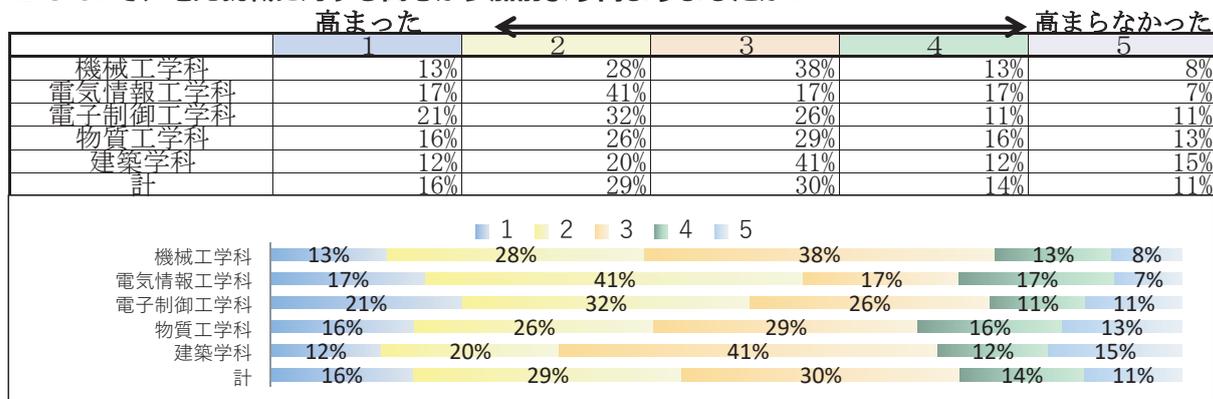
1-1 OFは、進路を考える上での参考になりましたか？



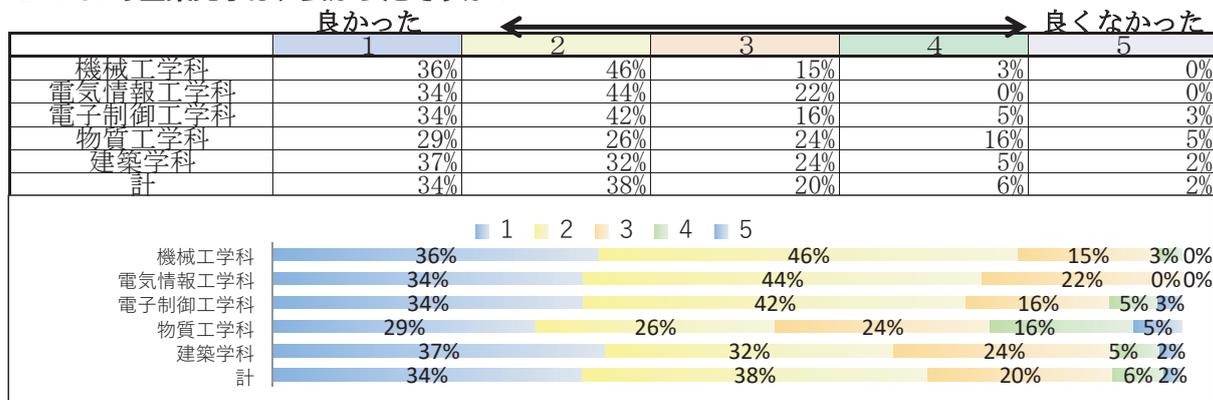
1-2 OFで、地元企業への理解は高まりましたか？



1-3 OFで、地元就職に対する関心が参加前より高まりましたか？



1-4 OFの企業見学は、良かったですか？



(3) 企業面談会

企業面談会は、学生が企業の担当者から直接説明を受け、就職活動やインターンシップ等への理解を深める場として位置付けて毎年実施している。単独高専の開催としては全国最大規模となる220以上の企業が参加し、本校からはインターンシップを控えた本科3年生と就職を控えた本科4年生及び専攻科1年生が参加した。

参加企業の中には、現在企業の第一線で活躍中の

米子高専OBやOGも姿を見せ、後輩学生に積極的に自社PRを行い、参加した学生達は、就職やインターンシップに役立つ情報を得ようと会社紹介パンフレット等を手に意欲的に各企業のブースを回り、熱心に説明を受けていた。

また、地域共同テクノセンターのコーディネーターやスタッフも出席し、学生や保護者に対しアドバイスやサポートを行った。

【実績】

年度	実施日	場所	参加企業数	参加学生数
2015	H28. 3. 7	米子コンベンションセンター	226	284
2016	H29. 3. 2	鳥取県立米子産業体育館	238	292
2017	H30. 1. 13	米子コンベンションセンター	247	338
2018	H31. 1. 12	米子コンベンションセンター	248	231
2019	R2. 1. 11	鳥取県立武道館	220	287

